

新聞投書とジェンダー意識の調査・研究

(男女共同参画社会に向けて)

(課題番号 12610553)

平成12年度～平成13年度科学研究費補助金

基盤研究(C)(2)研究成果報告書

平成14年 3 月



030850526 2

熊谷 滋子

(静岡大学人文学部助教授)

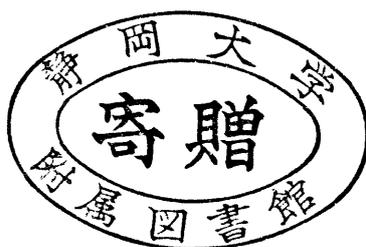
新聞投書とジェンダー意識の調査・研究

(男女共同参画社会に向けて)

(課題番号 12610553)

平成12年度～平成13年度科学研究費補助金

基盤研究(C)(2)研究成果報告書



平成14年3月

熊谷 滋子

(静岡大学人文学部助教授)

はしがき

日本において、平成11年、男女共同参画社会基本法が制定され、その冒頭部分に、「男女が、互いにその人権を尊重しつつ責任も分かち合い、性別にかかわらず、その個性と能力を十分に発揮することができる男女共同参画社会の実現は、緊要な課題となっている」と述べられている。

戦後、日本社会において、高度経済成長期には、その効率性のもと、性別役割分業体制、つまり、「男は仕事、女は家庭」という性役割が志向されてきたことは周知のことである。しかし、その矛盾が少子化社会等を生み出し、来る高齢社会を迎えるにあたって、はっきりとした将来像が描けなくなってしまっている。これらの問題を解決するために、男女が従来の「らしさ」とらわれることなく、それぞれがのびのびと生きていける社会、つまり、男女共同参画社会の実現が求められるようになってきている。

本調査・研究は、このような状況の中で、男女がどのようにしたら、従来の「らしさ」から解放され、一人一人が互いに尊重しあえるようになるかということ念頭にしながら、一つの方法を提案するために行なわれた。新聞投書は戦後の民主主義の中において、市民の意見交換、交流の場として、ますます充実したものになってきている。「らしさ」に気づくための一方法として、投書を利用した性別判断調査が、有効なのではないかと考えて取り組んできたものである。男女共同参画社会を実効あるものにするために、本調査・研究が一助となれば幸いである。

本調査・研究は、平成12年度、13年度科学研究費のおかげでなしえたものであり、ここに感謝を申し上げたい。真に男女が互いに尊重しあえる社会になることを願って、今後も本調査・研究を続けていきたいと考えている。

熊谷滋子

5 新聞投書を利用した調査のために	5 2
5.1 ジェンダーステレオタイプに合わない投書を入れる	5 2
5.2 判断根拠を回答者全員で共有する	5 2
5.3 書き言葉の性別判断をめぐる識者のコメントを紹介する	5 2
5.4 応用編	5 3
6 世間にある書き言葉に対するジェンダー意識	5 3
6.1 書き手の性が分かってコメントする場合	5 3
6.1.1 女性が書いたエッセイに対する評価	5 3
6.1.2 女性短歌に対する評価	5 4
6.1.3 女性作家に対する評価	5 5
6.2 書き手の性が分からずにコメントする場合	5 6
6.2.1 小説を利用した性別判断調査	5 6
6.2.1 幼女連続誘拐殺人事件における「犯行声明」「告白文」をめぐる	5 6
6.3 まとめ	5 7
おわりに	5 8
注	6 0
参考文献	6 3
資料(1)	6 5
資料(2)	6 8

はじめに

「投書は世につれ、世は投書につれ」といえるほど、投書は、時代を映す鏡であることは周知の事実である。その内容は、政治・経済といったものから、身の回りのあれこれまで、全て網羅している。特に、新聞投書は、戦後民主主義の一翼を担うものとして、ますます充実している。日本の新聞投書は、読者の意見交換・交流の場として、貴重なものであり、今後もその方向で進むことだろう⁽¹⁾。一つの小さな投書が思いがけないほどの影響力をもつこともあるし、ネットワークが作られることもある。その意義ははかりしれない。他の面には、いわば書き手として訓練を受けた記者が社の方針にそって書いているのに比べ、投書欄は、修正されているものがあるとはいえ、一般読者が意見を述べるという点で特徴がある。

ジェンダー研究にとっても、新聞投書は目が離せないものである。一つは、投書内容からジェンダーをみつめる。具体的なことは後述するが、戦後の民主主義のスローガンのもと、男女平等が叫ばれている中であって、女性が置かれている状況がそれほど良くなっていないことが投書を通して読み取れる。さらに、同じテーマを扱いながら、男性からの投書と女性からの投書では、差があることがある。大企業の経営破たんを扱ったテーマでも、男性は、政治・経済批判を中心として展開するが、女性は、当該企業に勤めている社員やその家族を気遣い、励ますことに重点がある。このような点から、投書内容から、その時代のジェンダーが様々にみえてくる。

二つめは、投書の文体からジェンダーをみつめる。新聞編集者の修正等を加味しても、性によって書き方に差がある。たとえば、「丁寧体」と称される「です・ます体」が、後述するように、女性の投書の方により多くみられることが指摘されている。

三つめは、投書の投稿者の性別判断を通して、ジェンダー意識を引き出すことができる。本調査・研究は、特に三つめに注目して、新聞投書を利用している。事の始まりは、1995年のある投書であった。詳細は後述するが、投書の書き手の個人情報（氏名、住所、年齢、職業）をふせて、投書を読み、その書き手が分かるかどうかという、単純な思いつきからはじまった。あるクラスの学生を対象に試みてみたところ、その結果に、筆者の方が驚かされた。回答者である学生が、意外にも事細かに判断根拠を書き、いわゆるジェンダー意識を率直に表現していたからである。その時、このような調査がジェンダー意識の気づきに有効なのではないかという期待を抱くようになり、本調査・研究の発想の原点となったのである。本調査・研究は、判断調査の回答者となってくれた大学生、社会人の協力なくしては、不可能だったものであり、また、回答者が率直にジェンダー意識を表現してくれなくてはなんの意味も意義もなかったものである。

研究組織

研究代表者

熊谷滋子（静岡大学人文学部助教授）

交付決定額（配分額）

（金額単位：千円）

	直接経費	間接経費	合計
平成12年度	800	0	800
平成13年度	700	0	700
総計	1,500	0	1,500

研究発表

（1）学会誌等

- 熊谷滋子 「新聞投書にみる文体の効果－『ですます体』と『非ですます体』の混用を通して－」『人文論集』静岡大学人文学部、第52号の1、2001年7月31日、pp.273~86.
- 熊谷滋子 「投書で『かなんことはかなんと言おう』」、遠藤織枝編『女とことば』、明石書店、2001年12月26日、pp.180~88.
- 熊谷滋子 「新聞投書を利用したジェンダー意識調査」『言語』vol.31, no.2、大修館書店、2002年2月号、pp.38~39.
- 熊谷滋子 「シングルウーマン覚え書き」 ツーラ・ゴードン著／熊谷滋子訳『シングルウーマン白書』ミネルヴァ書房、2001年10月15日、pp.243~55.

目 次

はじめに	1
1 新聞と女性の関わり	2
1.1 新聞に関わる女性のイメージや言説	2
1.1.1 テレビドラマにみる女性と新聞	2
1.1.2 新聞投書からみえる女性と新聞	2
1.2 戦後の新聞投書にみる女性たち(1)	5
1.2.1 投稿数と掲載数	5
1.2.2 新聞投書の文体と内容	8
1.3 戦後の新聞投書にみる女性たち(2)	10
1.4 まとめ	13
2 新聞投書を利用した意識調査	14
2.1 書き言葉にジェンダーはあるかという問い	14
2.2 方法	15
2.2.1 1995年に行なった調査について	15
2.2.2 山一証券自主廃業をめぐる投書	17
2.3 判断結果	18
2.4 性別判断に影響を与えた要因	22
2.4.1 身内・個人的事柄への言及がない場合	22
2.4.2 身内・個人的事柄への言及がある場合	23
2.5 まとめ	24
3 判断根拠にみるジェンダー意識と現実認識	26
3.1 ジェンダーステレオタイプが反映している判断根拠	26
3.1.1 語彙・文体・表現を通じたジェンダー意識	27
3.1.2 内容・論理展開にみるジェンダー意識	29
3.2 現実認識	38
3.3 ジェンダーステレオタイプに対する問いかけ	41
3.4 全体の感想	42
3.4.1 書き手の性は分かる／分からない	42
3.4.2 ジェンダーへの気づき、または葛藤	44
3.5 「ジェンダー・フリー」とは	46
4 新聞投書を利用したジェンダー意識調査の意義	49
4.1 本音の表現の場として	49
4.2 本音の共有	50
4.3 書き言葉への興味	51
4.4 調査の反省と課題	51

で、無視できないものであろう。

上の二つの例は女性が新聞を読まない（ようにみえる）のは書き方に原因があるとしているが、次の投書は、事はそれだけではないことを示している。一部抜粋したい。「追求に女性の目を」というタイトルで、投稿者は30歳の女性（主婦）である。

毎日、新聞を読みながら、記事の多くが、男性の側から書かれていると思えてなりません。政治経済、社会のどの面をとっても、視点がいずれも「男性の目」である。それがまた、あだとなって、記事から何かヒンヤリとした冷たいものを感じることがあります（中略）。富士見病院事件でも、被害者は圧倒的に女性が多く、女性記者が取材して書けば、もっと違った問題を提起できるのではないかと考えられます。

（「声」『朝日新聞』1980年10月15日付）

投稿者は、書き方というよりも、視点がもつばら男性側のものであることを問題にしている。書き手として、女性記者の必要性を説いている。女性が新聞に興味がなく読まないのではなくて、また、書き方だけでなく、新聞の視点が男性に偏ってしまっていることを指摘している。ここでは、1995年の投書で指摘していたような、女性受けするような新聞づくりではなくて、女性の実態を明らかにするための新聞づくりを求めている点が違っている。

いずれも、新聞に対する指摘が投書という媒体を通してなされているということから、投書欄の重要性がみてとれる。女性と新聞の関わりをみていくためにも、投書欄は読者からの反応を知る大切な鍵を握っている。女性が新聞とあまり親しくなれないことが、これまでは、新聞の書き方や視点などが原因であるとしている投書を紹介したが、次の投書は、家庭内での女性の立場からその原因を探っているものである。

「主婦と投書」という題目で、女性のみが投書できる「ひととき」欄に書かれたものである。一部抜粋したい。

主婦たちの手になる作文同人雑誌の会合があったおり、「皆さんが物を書かれる時、ご主人がいやな顔などされることはないでしょうか」との質問が出た。（中略）「妻が机に向っているということを、男は非常にいやがる。どうやら生意気に見えるらしい」「夫のいるところでは、絶対に書かない」「夫が帰宅すると、大急ぎで机の上を片付けてしまう」「煮たきのかたわら、隠れて読んだり書いたりするが、それでもしゅうとに見つかりと怒られる」（中略）主婦たちの書く男女同権論は、あながち皆がみな、同権の状態のもとに書かれたものとは言えないのである。

（「ひととき」『朝日新聞』1952年6月22日付）

戦後、民主主義、男女平等が華々しくうたわれる中で、現実には、旧態依然とした夫婦関係、家族関係にあって、女性は、自由にもものを書くことができない状況をあらわしている。1950年代後半には、女性の投稿がさかんになり、「投書夫人」ということばまで生み出されるにいたったが、女性がものを書くこと自体が揶揄されてつけられた表現とされ、多くの女性にとって、投書することは相当勇気のいることであった。ひるがえって、今日はどうだろう。女性が自由にもものを書ける状況にあるだろうか。

以上、ここでは、新聞と女性にかかわるイメージや投書の一部を取り上げながら、女性が依然として新聞とは離れた存在として描かれていること、つまり、女性が新聞を読んだり、投書したりする行為は日常生活のごく自然な行為とは描かれていないこと、しかし、一方で、女性は、新聞を読んだり、投書したりしたいと思っていること示した。新聞をめぐって、ジェンダーが根強く存在していることがうかがえる。

1.2 戦後の新聞投書にみる女性たち（1）

女性は、新聞をあまり読まないというイメージが根強く残っている現在、女性による投書は、戦後どのような変化を遂げてきているのか数字でとらえてみたい。『朝日新聞』の投書欄である「声」（東京本社版）をもとに考えていく。

1.2.1 投稿数と掲載数：女性の投書が確実に増加

『朝日新聞』で投書欄「声」がスタートしたのは、1945年11月である。当時は、1日1～2通の投書を掲載し、作家をはじめとして、著名人などの投書もあった。当時の投稿者の個人情報には、氏名、職業、または大まかな住所程度であった。その後、投書欄が夕刊に移動したりしたこともあったが、1974年あたりから、現在の投書欄に近い紙面構成と掲載数（一日7～8通）になり、今日にいたっている。

まず、投稿数から男女の投書を比較してみたい。新聞社の公表している数字（東京本社にきたもの）が出ている年度である1956年と2001年の投稿数を単純に列挙してみると、女性の投稿が増加していることがはっきりと分かる。

投稿数の推移

（ ）は男女比（％）

	1956年	2001年	増加率
女性	2249通（17.5）	15614通（37.8）	約7倍
男性	11497通（89.9）	25643通（62.2）	約2倍

1. 新聞と女性の関わり

本調査・研究の内容に入る前に、新聞をめぐる女性のイメージや新聞投書の全体的な傾向についてふれておきたい。

1.1 新聞にかかわる女性のイメージや言説

1.1.1 テレビドラマにみる女性と新聞

日本のテレビドラマのシーンでは、朝、リビングルームで、朝食を作る妻と傍らで朝刊を読む夫というパターンが、今も相変わらず、映しだされている。特に、家庭の主婦が新聞を読む場面は皆無といってもいいだろう⁽²⁾。新聞受けから新聞を取ってきて夫に手渡すシーンがせいぜいである。若い女性が新聞を読む姿はほとんどない。テレビドラマの中で、新聞は読まないが、テレビは見ている。テレビドラマゆえ、テレビを見ていることを強調したいのかどうか分からないが、テレビを見ている女性というイメージは存在している。1980年に注目され、批判された、「ぼく食べる人、わたし作る人」というテレビ広告の発想が今だに健在である⁽³⁾。逆に、テレビドラマで女性が新聞を読む場面は、探偵や推理などを扱ったテーマのドラマで、新聞記者や探偵などの役割、または、刑事として登場し、ある事件（過去）の真相や手がかりを求める場合にみられる。しかも、いかにも新聞を読んでいるという雰囲気描かれている⁽⁴⁾。また、年配の女性の場合は、老眼鏡や照明器具などの広告で、それらを買えば、新聞がよく読めるとする程度である。

一方、男性の場合は、日常生活の中で、違和感なく表現されている。メガネをかけて新聞をひろげる働き盛りのサラリーマンはもとより、退職後の年配の男性も、新聞を読む行為が日常生活の中の一コマとして描かれている。このように、マスメディアの中のテレビドラマの中で新聞を読む行為一つとってみても、ジェンダーが如実に顔を出してることがわかる。読む行為だけでもこれだけのイメージがあるのだから、まして女性が投書する行為などは、想像もつかないように感じられる。つまり、マスメディアにおいて、女性は新聞との関わりをもたない、不可視のイメージとして描かれているといえる。

1.1.2 新聞投書等からみえる女性と新聞

まず、前述した、本調査・研究のきっかけとなった投書を一部抜粋し、紹介したい。その投書は「女性の言葉で優しい記事を」というタイトルで、56歳の男性会社員からのものである。

私たち男性サラリーマンは朝、ラッシュの通勤電車で眠い目をこすりながらでも新聞を読む。が、女性の同じ姿はめったに見かけない。女性に新聞はファッションとして似合わないといった思い込みがいつの間にかでき上がっている。

このことに興味があった私は、仕事がらみで社内の女子社員に「女性が電車で新聞を読

まないわけ」をアンケートしたことがある。(中略)「新聞は男社会の話題が、男性向けに“男語”で書かれているから」というのがあった。(中略)

では、女性が一番親しんでいる印刷物は何かということ、折り込み広告とダイレクトメールだそうだ。毎日の生活に、即必要な情報を教えてくれるばかりでなく、自分たちに呼びかけてくれるような言葉、つまり“女語”で書かれているからだという。(中略)女性には「易しい」というより、「優しい」語りかけるような記事づくりが求められているように思う。(「声」、『朝日新聞』、1995年10月15日付)

投稿者は、新聞を車内で読まないのはファッションとしてふさわしくないと感じていることや、新聞自体が男社会の話題を男語で書いているせいだとし、女語(呼びかけるような言葉)で書くべきだと提案している。女性が電車内で新聞を読まない、他の場所でも読まないだろうということ、そして、「女語」で書かれれば、新聞を読むようになるだろうと推測している。確かに電車内で新聞を読んでいる女性は圧倒的に少ない。このような事実に対する視点としては興味深い点があるが、女性が好む新聞づくりの提案という発想が、あくまで男性側の視点であることは確認しておきたい。

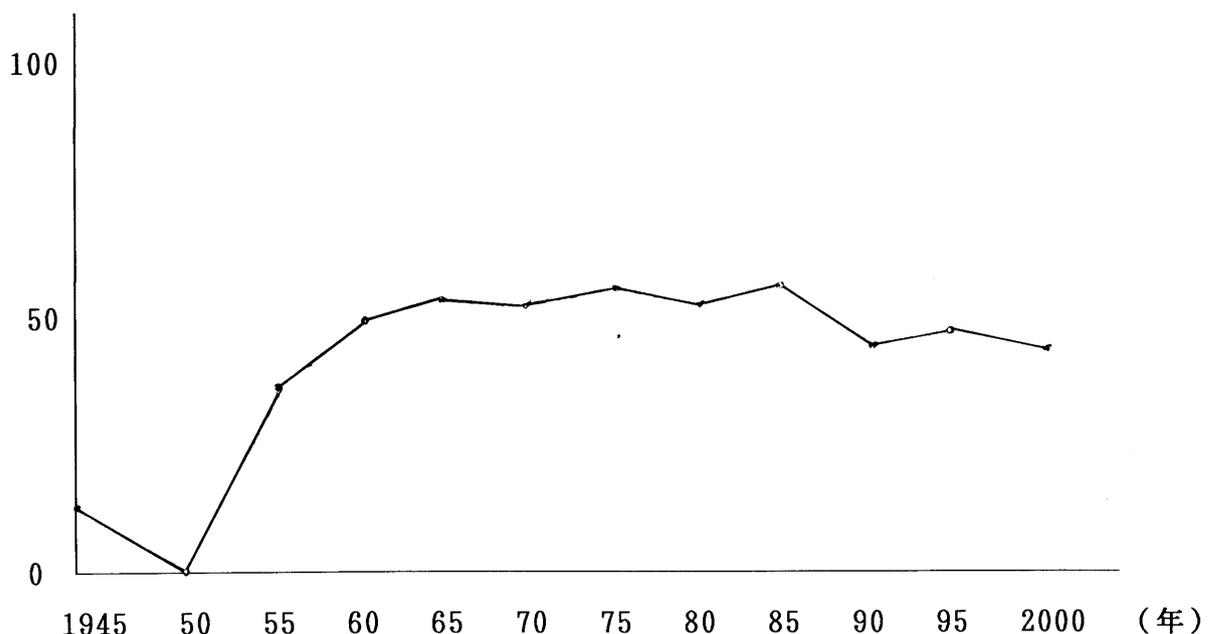
次に紹介するのは、明治時代に書かれたある社説である。平田由美(1999)は、明治時代に行なわれていた女性向けの学問は、「良妻賢母」養成のためであると結論づけている。その中で、『女學雑誌』の中に、文体にみる女らしさを示す箇所を指摘している。『女學雑誌』(第81号、明治20年10月22日)において、「女學生徒への苦情」と題する社説を掲載している。一老女からとする投書を社説の書き手が取り上げ、その投書を紹介し、コメントを加えながらまとめている。そこには、女学生である孫娘を案じる祖母の心情が綴られている。女性が学問に接することで女らしさがなくなってしまったことへの嘆きを、日常生活の事細かなエピソードを交えて訴えている。その一つに、文章表現をめぐるものがある。投稿者は、「作文は何やら男めきて新聞のやうに思われ候が、、、」と指摘し、孫娘が女らしさに欠ける表現しかできないことを嘆いている。それに対し、社説の書き手は、「消息文は矢張り温和しき方よろし」とコメントし、投稿者を支持している。この投書は、続けて、万事あらあらしくて少しも女らしくなく、口答えをするなど優しくなくなった孫娘のことを、学問によって女らしさがなくなったことを痛感している。ここで注目すべきところは、新聞(の書き方)は女のものではなく、男のものだとしている点である。当時、新聞には様々な文体が存在していたはずであるが、あくまで男の表現だと感じることがうかがわれる。

前述した1995年の投書で指摘された「“男語”で書かれているから、新聞を読まない」とする意見に共通したイメージ、つまり、新聞は男の文体で表現されているというイメージが、明治時代から、大正、昭和を経て、男女平等社会を志向する今日でも、脈々と存在していることを証明している。このような見方は、新聞と女性のかかわりを考える上

この表をみると、女性の投稿は、なんと7倍にも増えている。男性の投稿が、2倍程度の伸びにとどまっていることを考えると、相当なものである。男女比では、2割増である。とはいえ、男性に比べると、投稿数が約1万通少ない。1951年にスタートした同紙の女性のみが投稿できる「ひととき」欄（家庭面に掲載）では、現在一月に1000通を超える投稿があることを考慮すると、女性の投稿は合計すると、男性のそれとそれほど変わらないともいえる。ただし、女性のみが投稿できる欄と男女ともに投稿できる欄に対する女性の意識に多少の差があるかもしれない。想定する読み手は、前者の場合、家庭面に掲載されていることからいえるが、女性が中心である。したがって、女性には言えるが、男性には言いにくいと感じているものが、少なからず女性側の意識にあるため、「ひととき」欄への投稿が比較的多いのだろう。

投稿数の男女比を年代ごとに見てみると、女性の投稿の割合は、1962年までは、15～17%であったが、1964年から、30%台に突入する。これは、主婦の投稿が増えた時期と重なる。1965年は、過去最高の37.1%を記録しているが、1970年までは、30%前後をいったりきたりしており、1970年から1990年までは、28～29%あたりにとどまっている。1990年に再び30%台に突入する。1996年以降は、35%を上回り、2001年は、37.8%と、1965年の記録を破り、過去最高の割合となった。この点からも、女性の投稿数は、男性に比べて、戦後から今日にいたるまで、確実に増加しているがわかる。ちなみに、主婦という肩書きで投稿している人を図にしてみる。

図（1） 女性全投書に占める主婦の投書掲載率
（%） （各年度10月一ヵ月分）



これから分かることは、60年代から増加し、その後安定し、1985年頃より、減少してきている。この時期は、専業主婦と兼業主婦の割合が逆転した時期と重なる。

次に、掲載数をみてみたい。投書は、投稿したからといって必ずしも掲載されるとは限らない。掲載されてはじめて、一般読者の目にふれるチャンスがでてくる。戦後の掲載された投書の数と男女比を以下に示す。掲載年は、新聞発表の投稿数と違い、過去の新聞で確認数できるため、1946年度についても示している。また、女性の投書の掲載が男性を上回る前後の年度（1999年）も示している。

掲載数の推移

() は男女比

	女性	男性
1946年	62通 (9.1)	619通 (90.8)
1956年	172通 (17.6)	778通 (79.9)
1990年	875通 (33.6)	1726通 (66.4)
1998年	1232通 (48.7)	1296通 (51.3)
1999年	1332通 (51.3)	1263通 (48.7)
2000年	1526通 (54.9)	1252通 (45.1)
2001年	1435通 (52.2)	1315通 (47.8)

掲載された投書を1946年と2001年を比較すると、女性の場合、23倍にもものびており、男性の2倍ののびと対照的である。1999年には、掲載された投書の男女比が逆転し、2001年でも、女性の投書の方が多く掲載されている。投稿数との関係からみると、女性の方が掲載率がいいことを示している。この理由として考えられるものは、新聞社側の気づきや意識の変化として、男女平等をうたっている社会の中にあって、女性の声を取り上げる必要性と、右肩上がりの経済が望めなくなった昨今、経済中心の社会を前提としたままでは、世の中の歪みがすすんでしまうこと、家族、生活、教育、環境、医療等

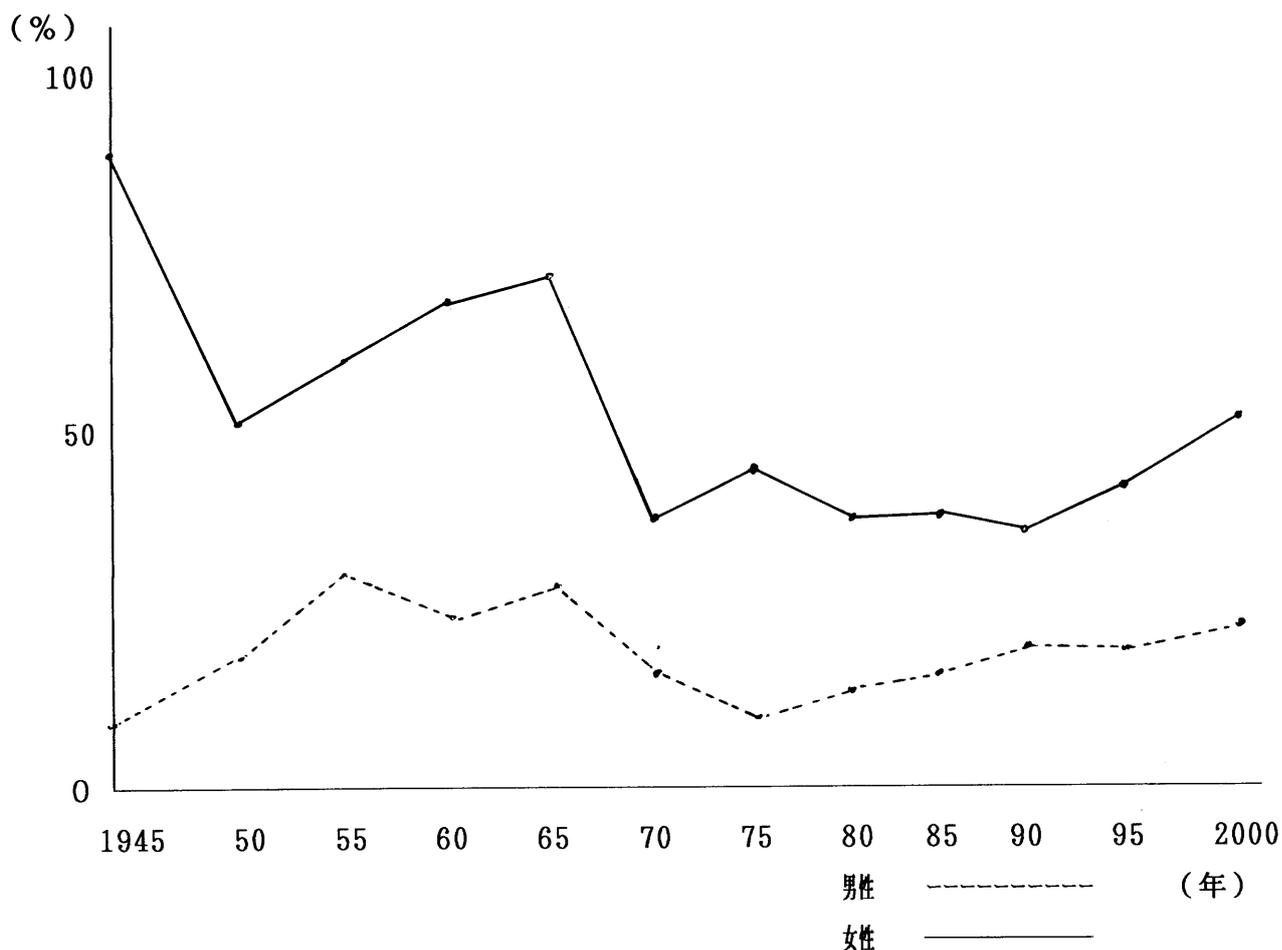
のかつては私的領域におしこめてきたものからの提案や意見に耳を傾けなければ、明るい将来像が描けなくなってきたと考えたからであろう。つまり、個人的なことこそむしろ社会の矛盾がみえてくると提唱したフェミニズムの姿勢、弱者の立場からものをみつめることの有効性に気づいてきたのではないだろうか。女性の投書がより多く掲載されるようになってきた今日、1.1でみたような新聞と女性にまつわるイメージとのギャップは、大きくなっているのかもしれない。

1.2.2 新聞投書の文体と内容

『朝日新聞』の場合、新聞の他の面では、もっぱら「だ・である体」で表現されているが、投書欄は、「です・ます体」などでも表現されている。「だ・である体」と「です・ます体」の混用もある。「です・ます体」はいわゆる丁寧体と称され、書き言葉でも「女らしい」文体とされてきた感がある。まず、新聞投書における「です・ます体」の使用率を年代をおってみたい。1945年から、5年ごとに10月一ヵ月分を調べた結果である。

図(2) 投書における「です・ます体」の使用率

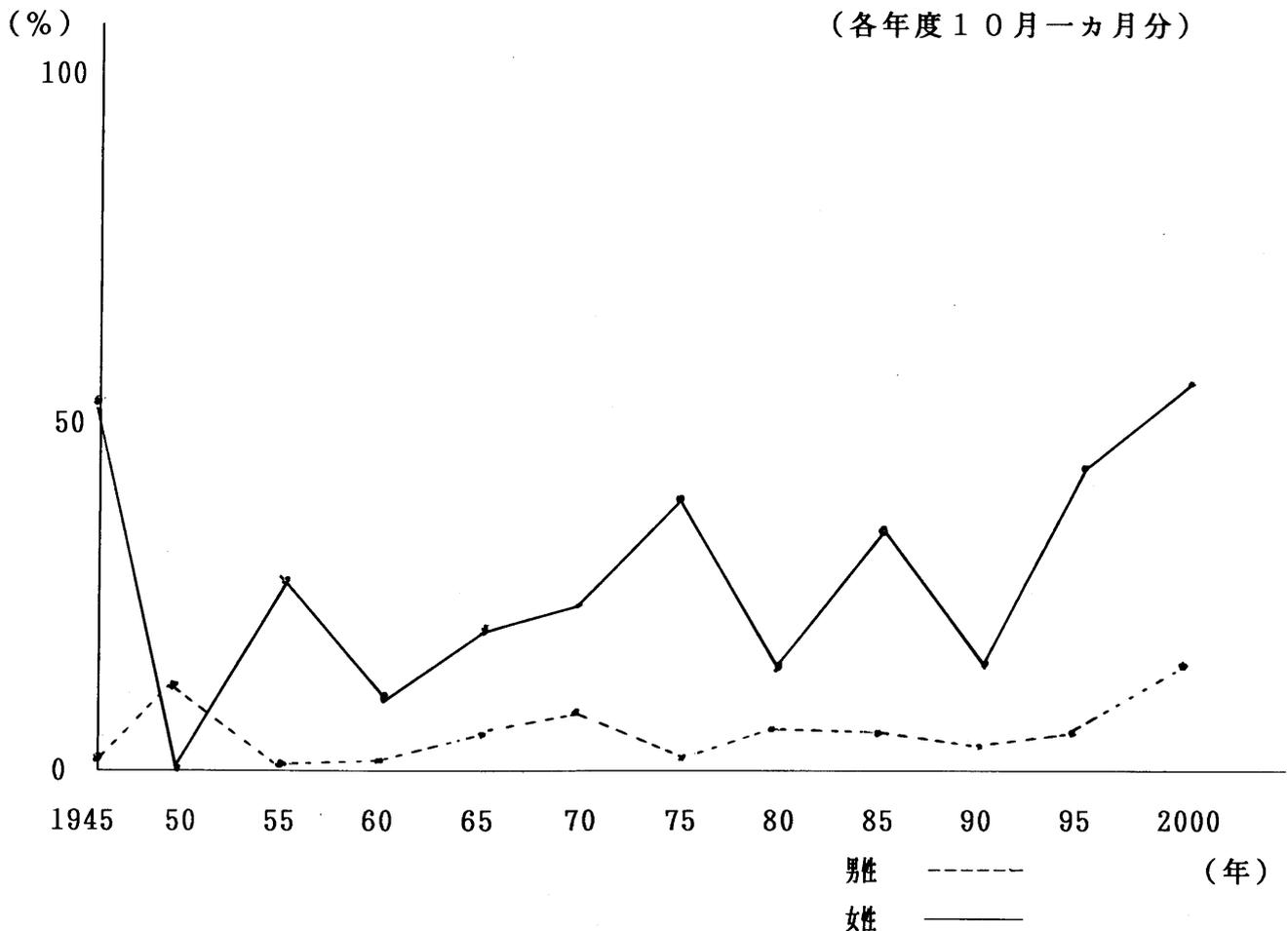
(各年度10月一ヵ月分)



やはり、女性の投書の方が男性のそれより、「です・ます体」で書かれている割合が高い。1945年から1965年までは、「です・ます体」で書かれたものは女性の投書としてもおかしくないほどである。それでも、その使用は、1965年以降の高度経済成長期あたりは減っており、1995年以降、わずかに増えているが、5割程度におさまっている。男性の方は、女性と同様な線を描いているが、全体的に、使用が2～3割にとどまっている。思ったより、女性の「です・ます体」の使用は多くない。

次に、投書で身内（家族や親戚等）についてふれているどうかの割合をみてみたい。前述したように、女性の投書の特徴の一つに、私的領域から発言する傾向にあるとされているが、その最たるものが、身内との関係の記述にあらわれている。

図（3） 投書における身内への言及率



ここでも、女性の投書の方が男性のそれよりも、身内への言及率が高い。男性は、投書において、あまり私的なことは持ち出さないためか、身内への言及は少なく、1割以下しかなかった。が、2000年にはじめて14.4%と1割を越え、ここにも家庭回帰の兆候が読み取れるかもしれない。

「です・ます体」の使用と身内への言及から、男女それぞれの投書の特徴がかいまみえてくる。しかし、これらの特徴も、時代により差があるため、今後の推移を見守っていく必要あるだろう。新聞投書における男女の言語的特徴は、他にもあるだろう。今後さらに調べていきたい⁽⁵⁾。

1.3 戦後の新聞投書にみる女性たち(2)

女性たちは、投書で何を表現してきたのだろうか。『朝日新聞』で女性だけが投稿できる「ひととき」欄を設けてから50年目ということで、記念講演シンポジウムが開かれたという記事がある⁽⁶⁾。そこで、奥田暁子氏は、「50年代は、『仕事か家庭か』と迷っていた投稿が、70年代には『仕事も家庭も』へ変わったことなど、女性の自立がうかがえる」と結論づけている。今回は、戦後の投書の一部を取り上げ、戦後の民主主義の掛け声の中で、女性が異議申し立てしたかったこと、訴えたかったことに注目し、幾つかスケッチしてみたい。参照した投書は、1945年(11月、12月)、1946年から1955年までの各年度10月分一ヵ月分、1955年から5年ごとに10月一ヵ月分である。掲載月日は上記の範囲内のものは省略する。タイトルはカギカッコで示し、掲載年度はその後のカッコ内に示している。

まず、母子家庭の生きにくさを訴えているものがある。親子二人暮らしの母親が、残業し、内職しても、月9、500円にしかならず、途方にくれている「月収1万5千円の夢」(1960)や、40なかばの子持ち未亡人が一家を支えるだけの職がないため、「重い住民税に未亡人の悲哀」(1970)を感じている。配偶者がなく子供のいる女性は「年令を理由に続く契約社員」(2000)のままにされ、生活していけるかどうか不安になっている。女性が子供とともに安心して暮らしていける社会にいまだになっていないことが、投書からみえてくる。出生率の低下を嘆く前に、実際生まれてきた子供と母親の生きる権利を保障することが先決だということが、誰の目からも明らかだ。

第二に、家庭内での主婦という立場の矛盾についての投書も、戦後、たびたび顔を出してくる。「主婦とは何か」(1947. 2. 2)というタイトルで、「朝一番早く起き、夜は一番おそくやすみ、(中略)、お化粧もなく、すりきれたもんぺ」をはいて、忙しく、かつ苦しみつ、働いているのに、「主婦は働く人間として認められていない。一体主婦とは何だろう?」と問い返している。主婦は、高度経済成長期により多く生まれてきたが、1955年、石垣綾子氏が書いた「主婦という第二職業論」で、主婦論争が始まったのは、周知のことである⁽⁷⁾。投書において「主婦」という肩書は、1945年12月の投書に登場している。憧れの対象としての主婦から、矛盾をかかえた存在としての主婦に移行するのに、それほど時間がかからなかった。今日においても主婦論争は続いており、「人の目養える主婦業」(1995)と評価するのか、「落とし穴あり『家事は仕事』」(1995)と、世間の表層的な評価にだまされないようにとする論調がある。無償労働である家事を仕事とみなして評価することの社会的矛盾を指摘している。今の矛盾を抱えたままで

あれば、主婦という立場をめぐって、投書を通して今後も議論されていくテーマとなるだろう。

第三に、学校教育に対する批判や、校内でのいじめ、体罰、学校へ行けない苦しみについて訴えている。戦後、学校教育も大きな変化をせまられたが、実質的にどのように変化を遂げてきたのか、あらたな管理教育につながってきたのではないかという危惧が投書を通じて伝わってくる。教育現場において、「なぐる先生」（1948）がいること、子供にとって「教師の体罰はまさにいじめ」（1985）としてしか思われぬ。一方、「いやいや授業する先生」（1965）がいたり、「生徒のやる気を失わせる学校」（1995）に対して、心を痛めている。また、学校行事について、「遠足旅行に父兄代表も」（1954）行くべきとするものや、教師に対して、保護者がお礼する慣例のあることを知り、「あきれた運動会の反省会」（1975）と批判している。また、「受験戦争に片棒かつぐ国大付属校」（1975）と付属校の実情について、疑問をなげかけている。また、40才になった今でも夢にみるほどの「生涯消えないいじめの痛手」（1985）を受けたかつての生徒がおり、また、なぜいじめられたかという「理由探しではいじめ消えぬ」（2000）とまっとうな指摘をしている。一方で、友人とキャンプに行き、「不登校の娘とキャンプの火」（2000）をみつめながら、あせらず生きていこうと覚悟を決めた母親がいる。子供と接することの多い女性にとって、教育問題は座視できないテーマとして常にある。

第四に、出産・育児をめぐって、当事者である女性は、その矛盾に直面している。菊田医師の赤ちゃんあっせんをめぐって、「男性側からの意見高世氏に強く反発」（1975）している。ふしだらをかくし、戸籍を汚したくないだけの方便として行なっているとして、菊田氏を非難している高世氏の投書に対し、男性の責任を問わずに、産まされた女性だけを非難していると抗議している。また、出産・育児に対する制度の不備として、「出産に消費税 ドイツとは逆」（1990）なことをしている日本、生まれてからも「不十分な乳幼児の検診」（1965）しかなく、また、「無認可保育所の保母として」（1980）働く親への支援を行なってきたが、公的援助が望めない中で、悩んでいることを訴えている。せめて、家庭内では、育児について、一人で抱え込まずにパートナーである「夫に本音言い育児をともに」（1995）することで救われたことを紹介し、「育児と仕事の両立 夫と二人三脚で」（1990）行なおうと提唱している。

加えて、高齢社会を迎え、女性はさらに介護を担う役割を背負わされる矛盾を抱えているが、「家離れぬ夫と介護疲れの妻」（2000）を目のあたりにし、暗澹たる思いをしているヘルパーもいる。今でも家庭内のことを女性だけに負わせている状況があることを示している。

最後に、戦後、男女平等が叫ばれ、婦人参政権が与えられたにもかかわらず、家庭で職場で依然として差別のあることが投書からうかがえる。「婦人参政権と夫」（1945）と題された投書では、1946年に婦人参政権のもとで初の選挙が行なわれるが、その前

にまず、夫の権力と戦わなければならないと思う妻の気づきが表現されている。職場へ目を移すと、やはり、「職場の平等権」（1945）を確立する必要性があること、また、父親からの投書だが、先生をしている娘が遅くまで残って仕事をし、宴会ではオシャクまでさせられる「教育界の盲点」（1950）を追及している。また、男性と違った、「女子の職務年令制限」（1955）があり、早期に退職させられたり、働き続けたくても、結婚、出産、育児という節目節目で、結局、仕事をやめざるをえず、「退職迫られた女性たちの姿も」（1985）あることを訴えている。

大学などの教育を受けた後、さて就職しようとしても、四年くらいのサイクルで変わってくれる、若くきれいな女子社員を求めていることを知り、「女子学生きらいな企業体質のため息」（1980）をついている。女子大生を採用するところが少なく、採用してもアシスタント程度で、結婚、出産後は、家庭にという発想の企業をめぐる、「女子大生就職に四つの関門」（1980）が存在していることに不公平を感じている。2002年になっても、男子優先の就職状況に「今も変わらぬ就職の性差別」（2002年2月27日付）と頭をかかえている女性の高校教員の姿がある。

このような不当な扱いに対して、「女性学生たちもっと怒りを」（1995）持とうと励まし、確かな目で「こびを売らずに会社選ぼう」（1985）、「大卒女性よ希望を胸に」（1980）頑張ろうとエールを送っている。女性が差別を具体的に、リアルに感じる時は、就職活動の時である。それまでは、男女平等（建前であれ）をうたっている教育現場において、男性と同等にふるまえるし、その能力を認めてくれるチャンスもあるが、就職という世間の風を受けるとたちまち、自らの社会的地位の低さに直面せざるをえなくなってしまう。女性だからこのような扱いを受けるのだと直感では感じていても、自身の能力のせいだと諦めてしまうことも少なくない。このような投書は、戦後から現在にいたるまで、途切れることなく存在する。いかに差別が根深いか、社会に存在する壁の厚さを物語っている。

一方、女性に対する差別を指摘する投書のおかげで、同性である女性に対する注文や批判もある。婦人参政権の与えられた、初の選挙で当選した「婦人代議士」（1946）は、格好だけに気をとられ、すべきことをしていないと批判している。また、店での商品について尋ねてもあまりよく分かっていない様子に、「女店員の不勉強」（1954）を嘆いている。また、前述した就職差別に対しては、一方的に差別とするのではなく、「大卒女子の反省必要」（1980）と指摘し、女子にむいた仕事はやはりあるのだし、また、腰掛けのつもりの人は考え直した方がいいとアドバイスしている。これらは、確かに言われていることだけみればうなずける点もあるが、仮に、男性の「代議士」「店員」「大卒者」であったら、このような注文をするのかどうかはなはだ疑問が残る。同性が同性を厳しく見る傾向にあるが、特に女性の場合、さらに男性の目を通して見ている可能性もあり、さらに問題がより一層複雑になってくる。1975年、「ぼく食べる人、わたし作る人」というメッセージの広告に対して性役割を固定させてしまうと抗議した「婦人グループの差

別告発に疑問」(1975)を感じ、抗議が行き過ぎているのではないかと非難している。女性問題、女性差別が容易に解決されないのは、女性側のこうした分裂状況が一因になっていることがある。男性側の視点を内面化させていることに気づかないで、同性である女性を批判してしまうということが今日でもなくなるならない。

今は知られてきたジェンダー・フリーの発想は、「『らしさ』の強要と男女平等」(1970)という投書にかいまみえる。男女平等は「~らしさ」が消滅してはじめて実現すると主張しているこのような投書は、今後もさらに増えていくことだろうし、増えてほしいものである。

以上、大まかに女性の投書についてスケッチしてきたが、戦後50年という流れの中で、女性は、自らが置かれている女性の立場の矛盾を敏感に感じ、子供や高齢者などの弱者との関わりも深く、まさに当事者として告発すべく投書してきたことがうかがえる。何でもありの現代社会、一見豊かになったようにみえ、消費生活を謳歌しているような社会、また、民主主義、男女平等、男女共同参画社会を志向しているはずの現代社会だが、投書を読むかぎり、女性の置かれた状況が、自由で安心した生活が保障されるものになっていないということがはっきりと示されている。

1.4 まとめ

1章では、テレビドラマなどの媒体では、女性にとって、新聞との関わりが薄いものとして描かれていることを示した。新聞は男のものとする発想が、今だに根強く存在している。が、一方で、女性の投書は増加し、一般読者の目にふれる機会が格段に増えてきている。女性の声を無視しては、社会そのものがたちいかなくなってきている。社会の矛盾を引き受けざるをえない弱者としても、生活者としても、今後、女性の発言は無視できないものとなるであろう。

イギリスの地下鉄では新聞を読む女性の姿をよく見かける。日本でも、そのような光景が普通に見られるようになる日はいつのことだろう。文体、視点などを含め、民主主義の一翼を担う新聞が男のものとするイメージを払拭し、女性も紙面づくりに対等に参加できるような、新聞紙面での男女共同参画を進めてほしい。そのためにも、今後ますます、一般読者の交流の場であり、また、社会の矛盾を解決の糸口を提供するような投書欄の充実を期待したい。

2. 新聞投書を利用した意識調査

2.1 書き言葉にジェンダーはあるかという問い

日本語では、話し言葉に男女差があるといわれてきたし、また、その存在の有無やその存在の起源を追求する研究はさかに行なわれてきている⁽¹⁾。分析対象は、小説やテレビドラマといったマスメディアから方言にいたるまで幅広い。ただ、規範としての、あるべき「女ことば」「女らしいことば」の強制が指摘されるようになり⁽²⁾、また、現実の女性の話し方を調査研究した、現代日本語研究会編『職場における女性ことば』という労作では、職場における女性の話しことばを丁寧に調査・分析している。どちらにしても、話し言葉における男女差をめぐる研究は活発に行なわれている。

一方、書き言葉における男女差については、話し言葉ほどには、調査研究されてこなかったと思われる。寿岳章子氏は、『日本語と女』（1979）において、調査した結果、「女が書いたからと言って、明々白々に女らしくなるわけではない。女なるが故に、すべての女性に共通の女らしさというものが文章特性として存在することはありえない」としている。漆田和代氏は、「『女らしい』文章は過去のもの」と指摘し、また、女だから自然に女らしい文章が書けるのではなく、「『女性らしい』文章という文体戦略」が存在し、意図的に「女らしさ」を装った結果の文章にすぎないと主張している⁽³⁾。また、佐々木由香氏は、インターネット上でのやりとりで、書き手の性を偽って試みた調査を紹介している⁽⁴⁾。雑誌、小説等を分析対象にすることが多い中で、今回は、第1章で、新聞投書を対象に男女差の一部を調べている。しかし、これも不十分であることに違いない。これまでのところ、話し言葉に比べ、書き言葉に男女差があるかどうか問われても、確実にこれという決定的な要素が見いだせるとは言い切れないのである。

書き言葉は学校に入学後、学習するものとしてあり、話し言葉のように、生まれてから空気のように自然に接して身につけたものとは違っている。土地の話し言葉である方言を文章化できないのもその証拠である。学校という文脈で教えられるものであるが故に、すでにある種の規範性をもっていると考えられ、また、制度化されているものである。漢字練習から始まり、句読点の場所や原稿用紙の使い方など多岐にわたる指導が行なわれる。ただし、今では、「女らしく」書くという指導は、話し言葉ほどには強くないであろう。なぜなら、繰り返すが、教育現場では、男女平等を標榜しているためである。世間では、今でも女性の手紙やはがきの書き方集のようなものが出回っているが、マナーとしての「女らしい」書き方は、そのような手本を参照しないとわからないということを示している。つまり、漆田氏の指摘したように、女だからといって自然に「女らしい」書き方ができるというものではないのである。

今回の調査・研究において明らかにしたいことは、書き言葉にジェンダーがあるかどうかということよりも、書き言葉にジェンダーが感じられるかどうかという、いわば、読み手のジェンダー意識をみつめてみたいということである。読み手の意識の方に逆に焦点をあてて考えてみようと思ったのである。前述した「女性の言葉で優しい記事を」とい

う投書をきっかけに、一般読者が書いている投書を利用して、書き言葉からジェンダーが感じられるかどうか確かめてみたいと思った。ここで扱う投書は、いずれも『朝日新聞』東京本社版（縮刷版）である⁽⁵⁾。

2.2 方法

2.2.1 1995年に行なった調査について

1995年に、今回の調査・研究の先駆けとして、半ば思いつきの調査を試みた。ある日の新聞投書から、いくつかの投書をランダムに取り出し、住所、氏名、年令、職業等の個人情報をふせて、それぞれの投書につき、書き手の性を推測し、その理由を自由に記述してもらおうという調査を、大学生を対象に行なった。最初は、話し言葉とは違い、書き言葉のため、書き手の性に思いをめぐらし、推測し、さらに理由まで書くのはそれほど簡単にはいかないだろうと思っていた。しかし、回答を読み進めていくうちに、意外にも学生たちの率直なジェンダー意識が吐露されていることに筆者の方が驚くことになった。その詳細は、熊谷（1997）を参照されたい。

1995年に行なった調査に利用した投書は、1995年10月13日付のもので、以下に投書番号とタイトル、主な個人情報を示す。具体的な内容は、資料（1）を参照されたい。

- ①「法相辞任劇は政治不信増幅」（男性、59歳、市議会議員）
- ②「イタリアにも『秋刀魚の味』」（男性、31歳、フリーライター）
- ③「金融機関自ら厳しい改革を」（男性、36歳、自営業）
- ④「小学生証明書発行できぬか」（女性、34歳、主婦）
- ⑤「駆け込み的な核実験許せぬ」（男性、34歳、会社員）

結果は以下のようなになった。調査対象は、男女大学生1～4年生である。

表(1) 1995年 投書の性別判断調査結果⁽⁶⁾

()は%

回答者	男性(120名)		女性(112名)	
投書番号 / 判断した性	男性	女性	男性	女性
①	64(53.3)	52(43.3)	73(65.2)	39(34.8)
②	29(24.2)	89(74.2)	27(24.1)	84(75.0)
③	107(89.2)	10(8.3)	99(88.4)	13(11.6)
④	42(35.0)	77(64.2)	29(25.9)	81(72.3)
⑤	45(37.2)	69(57.5)	38(33.9)	69(61.6)

(無回答は計上されていない)

この結果からいえることは、回答者による性差、学年差はみられず、ある程度共通した結果になっている。つまり、書き言葉に対する書き手の性に対して、ある一定の意識が、男女共通にあるということが分かる。

しかし、反省点として、次の3点があげられる。まず第一に、調査に利用した投書の書き手が、1通(投書番号④)以外、全て男性であり、回答で、全て男性としてもかなりの正解となってしまうことになる。第二に、「です・ます体」で書かれた投書が1通(投書番号②)のみで、あとは全て「だ・である体」であったため、文体をめぐるジェンダー意識を探ることができない。第三に、第二点目と深くかかわるが、書き手の性を判断する際に、何が決定的な要因として作用したのか分からないということである。詳しくいうと、たとえば、②の投書の場合、書き手を女性と判断しているものが多かった(74~75%)が、その決定要因は、話題(料理に関すること)なのか文体(「です・ます体」)なのか分からない。実際の投稿者は男性であったが、料理の話題であり、かつ、「です・ます体」であることから、女性をめぐるステレオタイプに両方とも合致しているため、どちらの要因がより強く判断を左右したのか分からないままである⁽⁷⁾。

以上の反省点をふまえて、今回の調査・研究を行なう際に、投書をランダムに取り出すのではなく、文体と内容の二要因に絞って、男女同数の書き手の投書を用意することに

した。

2.2.2 山一証券自主廃業をめぐる投書

1995年に行なった調査の反省点をふまえ、今回は、話題を一つに絞り、1997年11月に起きた山一証券自主廃業にまつわる投書（1997.11.23～12.31に掲載されたもの）を採用することにした。熊谷（1999b）に山一証券自主廃業をめぐる新聞投書の分析があるので、投書自体の分析はそちらを参照されたい。山一証券自主廃業とは、1997年11月22日、社長の号泣とともに日本中を駆けめぐった大企業の経営破たんのことである。自主廃業について事前に知っていたのは、会社のトップのみだったということで、その驚きや落胆、動揺は大きかった。大企業の経営破たんをめぐる、新聞各社は特集記事を組み、社会面でも大きく扱い、新聞投書にも、関連するものが掲載されていた⁽⁸⁾。

今回の調査では、話題を一つに絞った上で、二つの要因に注目し、投書を選択することにした。まず、一つは、文体である。「です・ます体」で書かれているものとそうでないもの、もう一つは、内容として、身内（家族や親戚等）のことや個人的事柄（体験談等）について記述しているものとそうでないものを選び出した。二つの要因の組合せで、4つのタイプに分類され、それぞれにつき、男女それぞれの投書、計8通を選び出した。以下の表にまとめられる。

	です・ます体	身内・個人的 事柄への言及	投書番号	
			男性	女性
1	○	×	①	⑤
2	×	○	⑥	②
3	○	○	③	⑦
4	×	×	⑧	④

○：あてはまる

×：あてはまらない

上の表で、例えば、分類1の投書は、「です・ます体」で書かれているもので、身内や個人的事柄への言及はない投書で、男性の投書①と女性の投書⑤がそれにあたることを示す。今回採用した投書番号とタイトル、大まかな個人情報以下の通りである。投書の具体的な内容は資料(2)を参照されたい。

- ①「経営破たんの法的責任問え」(男性、62歳、無職)
- ②「本当に強いね 山一のみんな」(女性、32歳、主婦)
- ③「山一での過去捨てて未来を」(男性、48歳、会社員)
- ④「どこまで続くバブルのツケ」(女性、46歳、主婦)
- ⑤「山一社員を郵貯で生かせ」(女性、36歳、経理パート)
- ⑥「破たんの責任私財提供せよ」(男性、63歳、元信組専務理事)
- ⑦「山一ミディの母よ頑張って」(女性、33歳、主婦)
- ⑧「公的支援なら責任者追及を」(男性、52歳、弁護士)

2.3 判断結果

本調査・研究の前年に行なったもの(詳細は、熊谷(1999c)を参照されたい)もあわせて、紹介したい。対象は大学生(高専生を含む)、社会人である。

表(2) 1999年 山一証券自主廃業関連の投書についての性別判断調査⁽⁹⁾

数字の下段の()は%
?はどちらとも判断できないもの

投書番号	回答者			男性(108名)			女性(110名)			合計(218名)		
	判断	男性	女性	?	男性	女性	?	男性	女性	?		
①		27 (25.0)	66 (61.1)	15 (13.8)	31 (28.1)	63 (57.2)	16 (14.5)	58 (26.6)	129 (59.1)	31 (14.2)		
②		11 (10.1)	96 (88.8)	1 (0.9)	10 (9.0)	99 (90)	1 (0.9)	21 (9.6)	195 (89.4)	2 (0.9)		
③		105 (97.2)	2 (1.8)	1 (0.9)	102 (92.7)	4 (3.6)	3 (2.7)	207 (94.9)	6 (2.7)	4 (1.8)		
④		90 (83.3)	7 (6.4)	11 (10.1)	86 (78.1)	16 (14.5)	8 (7.2)	176 (80.7)	23 (10.5)	19 (8.7)		
⑤		35 (32.4)	54 (50)	19 (17.5)	34 (30.9)	59 (53.6)	17 (15.4)	69 (31.6)	113 (51.8)	36 (16.5)		
⑥		93 (86.1)	5 (4.6)	2 (1.8)	104 (94.5)	3 (2.7)	3 (2.7)	197 (90.3)	8 (3.6)	5 (2.2)		
⑦		15 (13.8)	89 (82.4)	4 (3.7)	10 (9.0)	94 (85.4)	6 (5.4)	25 (11.4)	183 (83.9)	10 (4.5)		
⑧		95 (87.9)	4 (3.7)	9 (8.3)	86 (78.1)	12 (10.9)	12 (10.9)	181 (83.0)	16 (7.3)	21 (9.6)		

表(3) 2000年～2001年 山一証券自主廃業関連の投書についての性別判断調査
(学生)

数字の下段の()は%
?はどちらとも判断できないもの

投書番号	回答者			男性(190名)			女性(127名)			合計(317名)		
	判断	男性	女性	?	男性	女性	?	男性	女性	?		
①		69	109	11	30	79	18	99	188	29		
		(36.3)	(57.3)	(5.7)	(23.6)	(62.2)	(14.1)	(31.2)	(59.3)	(9.1)		
②		11	178	1	10	116	1	21	294	2		
		(5.7)	(93.6)	(0.5)	(7.8)	(91.3)	(0.7)	(6.6)	(92.7)	(0.6)		
③		188	2	0	122	3	2	310	5	2		
		(98.9)	(1.0)	(0)	(96.0)	(2.3)	(1.5)	(97.7)	(1.5)	(0.6)		
④		161	21	6	90	24	11	251	45	17		
		(84.7)	(11.0)	(3.1)	(70.8)	(18.8)	(8.6)	(79.1)	(14.1)	(5.3)		
⑤		69	100	21	33	83	11	102	183	32		
		(36.3)	(52.6)	(0.5)	(25.9)	(65.3)	(8.6)	(32.1)	(57.7)	(10.0)		
⑥		174	12	1	117	7	3	291	19	4		
		(91.5)	(6.3)	(0.5)	(92.1)	(5.5)	(2.3)	(91.7)	(5.9)	(1.2)		
⑦		22	161	2	12	111	3	334	272	5		
		(11.5)	(84.7)	(1.0)	(9.4)	(87.4)	(2.3)	(10.7)	(85.8)	(1.5)		
⑧		159	14	11	101	17	12	260	31	23		
		(83.6)	(7.3)	(5.7)	(79.5)	(13.3)	(9.4)	(82.1)	(9.7)	(7.2)		

表(4) 2000年～2001年 山一証券自主廃業関連の投書についての性別判断調査
(社会人)

数字の下段の()は%
?はどちらとも判断できないもの

投書番号	回答者			男性(7名)			女性(14名)			合計(21名)		
	判断	男性	女性	?	男性	女性	?	男性	女性	?		
①		4 (57.1)	2 (28.5)	1 (14.2)	1 (7.1)	11 (78.5)	2 (14.2)	5 (23.8)	14 (66.6)	3 (14.2)		
②		0 (0)	7 (100)	0 (0)	0 (0)	14 (100)	0 (0)	0 (0)	21 (100)	0 (0)		
③		6 (85.7)	1 (14.2)	0 (0)	14 (100)	0 (0)	0 (0)	20 (95.2)	1 (4.6)	0 (0)		
④		6 (85.7)	1 (14.2)	0 (0)	12 (85.7)	1 (7.1)	1 (7.1)	18 (85.7)	2 (9.5)	1 (4.6)		
⑤		0 (0)	6 (85.7)	1 (14.2)	3 (21.4)	8 (57.1)	3 (21.4)	3 (14.2)	14 (66.6)	4 (19.0)		
⑥		7 (100)	0 (0)	0 (0)	13 (92.8)	1 (7.1)	0 (0)	20 (95.2)	1 (4.6)	0 (0)		
⑦		1 (14.2)	6 (85.7)	0 (0)	2 (14.2)	12 (85.7)	0 (0)	3 (14.2)	18 (85.7)	0 (0)		
⑧		7 (100)	0 (0)	0 (0)	14 (100)	0 (0)	0 (0)	21 (100)	0 (0)	0 (0)		

1995年に行なった調査と同様に、今回の調査においても、回答者の性、専攻（文系か理系）、学年、年齢（学生か社会人か）による差はみられず、ある共通した判断がなされていることが確認できる。今回、調査に採用した投書のテーマは、山一証券自主廃業という、どちらかといえば、経済を扱った投書であるため、書き手が男性であると判断しがちであったことを付け加えたい。

これらの結果を、前述した要因を考慮した分類にあてはめて整理しなおすと、以下の通りとなる。

	です・ます体	身内・個人的 事柄への言及	投書番号		判断結果
			男性	女性	
1	○	×	①	⑤	女性
2	×	○	⑥	②	◎
3	○	○	③	⑦	◎
4	×	×	⑧	④	男性

◎：判断した性と書き手の性が一致しているもの

2.4 性別判断に影響を与えた要因

2.4.1 身内・個人的事柄への言及がない場合：分類1と4

身内や個人的事柄への言及がない場合、文体で判断する傾向にあることが分かる。分類1は、「です・ます体」で書かれているため、女性と判断しがちであり、分類4は、「だ・である体」で書かれているため男性と判断しがちである。つまり、内容で判断する要素がない場合は、文体から性を判断する傾向にあるということである。この点から、「です・ます体」は、丁寧体といわれ、「女らしい文体」と思われていることが確認できる。それでも、経済にまつわる投書のために、分類1（①、⑤）では、女性と判断するものが6割程度にとどまっているのに対し、分類4（④、⑧）では、男性と判断するものが8割以上という対照をなしている。また、分類1は、書き手の性の判断がつかない割合が他の分類に比べ高い。1.2.2でふれたように、新聞投書において「です・ます体」で書いているものは女性の投書に多くみられるが、それでも半数にとどまっている。後述するように、回答者の中には、文体が「です・ます」体だからといって、女性とは限らないとする見方

もある。今後、文体とジェンダーについて、動向を見守りたい。

ここで、文体と内容といふかねあいから、日本語の話し言葉調の文体について興味深い指摘があるので紹介したい。藤野千夜氏は、「日本語とセクシュアリティ」（2001：128～130）において、語尾の使い方が安定していると内容を変えても、話し手の性が固定されるということを次の例をまじえて説明している。（下線部は筆者）

例文18 「先週まで夏みたいだったのに、もうすっかり秋よね。そういえば昨日、秋鮭入りのコロッケをたくさん作ったわよ」

例文19 「先週まで夏みたいだったのに、もうすっかり秋よね。そういえば昨日、秋祭りでおみこしかついだわよ」

例文20 「先週まで夏みたいだったのに、もうすっかり秋だよな。そういえば昨日、秋鮭入りのコロッケをたくさん作ったんだぜ」

例文21 「先週まで夏みたいだったのに、もうすっかり秋だよな。そういえば昨日、野原にシロツメクサを摘みに行ったんだぜ」

下線部の語尾がすでにある性を志向している場合、いくら内容（女らしい＝コロッケ作りやシロツメクサ摘み、男らしい＝みこしかつぎ）を交換しても、話し手の性はおのずと決まってしまう。例文21は、話し手は男性とすることに異論はないだろう。セリフの話言葉は、特に語尾で話し手の性がわかりやすいため、内容を変えても影響がないことを示している。書き言葉は、それほどはっきりとした性差が文体としてあるわけではないが、少なくとも「です・ます体」を女性に結びつけていることは確認できる。内容から判断できないときは、文体で判断する傾向にあり、話し言葉よりは弱い、文体から感じられるセクシュアリティは存在するといえる。

2.4.2 身内・個人的事柄への言及がある場合：分類2と3

身内のことや体験談などの個人的事柄などが書かれている場合は、書き手の性が判断しやすいという結果となった。女性の投書（②、⑦）については、8～9割、男性の投書（③、⑥）については、9割強が正答している。このことは何を意味しているのだろうか。熊谷（1999b）でまとめたように、これらの投書が山一証券という大企業にまつわるテーマであり、しかも、性別役割分業体制のもとになされていたということが、投書内容に具体的に示されている。「男は仕事、女は家庭」という、高度経済成長期における男女関係、夫婦関係が、今回の投書にも色濃く反映している。判断根拠のところでも紹介するが、典型としては、自身の苦勞した体験を語る男性の投書と、失業するであろう社員や社員の家族を励ます女性の投書にみられる。そして、今回の調査結果を通して、回答者は書き手のおかれた状況を理解しているといえる。つまり、書き手を取りまく社会関係について、回答者はその同じ社会状況の中にいる者として、十分に認識していることを示してい

る。

また、個人的事柄に言及する場合に、書き手の性によって差がみられることを指摘したい。van Dijk(1975:286)は、個人的な話を引き合いに出す場合は、相手に情報を与えるためだけでなく、相手に注意や忠告をしたり、相手の行動を促したり、または、自分に対する称賛や敬意を期待して語っているとしている。今回の投書において、回答者にとって、個人的事柄がある投書の方が書き手の性を推測しやすかったのは、van Dijkの指摘ともあわせて、書き手の性によって書き方に差がみだせたからではないかと考える。つまり、男性の場合、個人的事柄というのは、自分自身のかつてのつらい体験を語っている。例えば、投書③では、「23年間勤めた中小メーカーを体をこわしたのが原因で退職し、現在の会社に採用されました」、投書⑥では、「知事に財産を提供するように言われ、私財全部(当時3,000万円相当)を提供し、裸一貫になった」と記している。このようなつらい体験を語ることで、教訓、忠告を与えている。また、つらい体験を生きぬいた書き手は、自分に対する称賛を期待していることがわかる。投書③では、「再就職後の私自身の努力にも自分ながら拍手を送っております」、投書⑥では、「従業員は一人も首にせず、役員は全員退職した。当時、私は42歳、子供3人を抱えて、死にものぐるいで働いた」と、自分の奮闘ぶりを紹介し、読み手からの称賛を求めているようにも感じられる。

一方、女性の投書では、自主廃業によって失業させられる社員、しかも一家の大黒柱であるがゆえの、その家族の動揺や不安に対して、同情や励ましを送っている。女性の投書によくみられるものの一つが、「頑張って」というフレーズである。この表現が象徴的に女性の気持ちを示している。山一証券自主廃業に関連した投書のうち、「頑張って」という表現を用いたものが、女性の全投書のうち、34.7%にもものぼる。それに比べて、男性の投書には、この表現がでてくるものが1通もなかった⁽¹⁰⁾。同情、共感、励ましを与える立場としての女性の投書は、例えば、投書②では、「今でも働く同期の友人や、お世話になった上司、先輩方、多数の同僚たちのことを考えると、本当に切なかった」とし、また、「みんな、本当に強いね」と感心している。投書⑦では、自身の母が契約社員として、日頃から勉強し、仕事に精出してきたのに、突然の破たんのせいで、「食事もできないほど落ち込んで」しまったこと、母を通し、「報道されない多くの失業者がいることを知」ったことを述べた上で、最後に、「『逆境にめげずに頑張って』としかいえませんが、早くいつもの張り切り母さんに戻ってほしいと願っています」とむすんでいる。

個人的事柄をめぐる記述の中に、それぞれの書き手のおかれた社会関係が顕著に、そして、性別役割分業的発想が反映され、そのことが、読み手に、性を判断しやすくさせていることが分かる。後述するように、回答者の指摘にも、個人的事柄があると判断しやすいという記述があったことでも裏付けられる。

2.5 まとめ

以上、今回の調査からみえてきたものの一つとして、投書の書き手の性別判断に影響を

与えた要因として、身内・個人的事柄についての言及がない場合には、文体で判断し、女性が書いたと判断するものは、「です・ます体」（いわゆる丁寧体）を手がかりとしている。一方、身内・個人的事柄の言及がある場合には、書き手の性が推測しやすいという結果となった。実際の投書において、「です・ます体」の使用については、男女差があるものの、今後、社会状況が変化する中で、「です・ます体」が女らしさを示すものとなっていくのか、そしてそれが判断材料となるのか、見続けていきたい。また、身内・個人的事柄についての記述が、今後、男女差が存続したままであるのか、その場合、内容自体に変化はないのか、それとも、身内・個人的事柄からは、男女差がみえてくこなくなるのか、フォローしていきたい。

3 判断根拠にみるジェンダー意識と現実認識

今回の調査・研究の主眼は、回答者のジェンダーをめぐる本音を引き出すことである。正解かどうかということよりも、どのような判断根拠が示されているのかということが重要なのである。ここでは、回答者が表現した判断根拠を紹介し、建前だけの問いでは出てこないだろう本音やその本音をめぐる葛藤ぶりをみていきたい。これは、あくまでジェンダー意識の気づきのための重要なきっかけとなるものとして紹介するものであり、意識が低いとか、こんな偏見をもっているから自覚が足りないということを主張するためのものではないことを断っておきたい。筆者自身の中にもあるジェンダー意識である。現実の社会において、特に男女平等をうたう教育現場に身を置く筆者も学生も本音で語り合うことの難しさを感じている。本音を言えないからこそ、実感としても男女平等社会を模索していくことの拠り所のなさを感じていると思われる。本音からスタートし、その本音とどう向きあうか、特に学生である若い人の本音をどう受けとめていくのかによって、将来への手がかりをつかめるかが決まると思う。こうすべきという規範を語るよりも、本音を引き出すことの大切さを痛感している。したがって、これから紹介するものは、特に、ジェンダー意識が表現されている判断根拠の部分は、むしろ、あえて表現してくれた本音として、評価するものである。

以下、判断根拠を紹介していくが、ジェンダーステレオタイプが反映しているもの（＝本音）と、現実をみていると思われるもの、そして、ジェンダーによる矛盾を意識したものなどに分けて、順にみていく⁽¹⁾。

3.1 ジェンダーステレオタイプが反映している判断根拠

今回の調査で、最も注目したいものは、本音ともいえるジェンダーをめぐる固定観念をもって、性別判断の根拠としたものである。1995年の調査においても、こちらが、意図しないことまで回答してくれたのが、このタイプであり、それがきっかけとなって、今回の調査・研究につながったものである。

新聞投書を書く人はどんな人だろうか。その具体的イメージが浮かんでくるだろうか。今回の調査にみられる投書の書き手の典型は、1995年の調査と同様に、少なくとも特に大学生のイメージでは、男性ならば、サラリーマン（現役か退職）、女性ならば、主婦である。この典型ですぐ思いあたることは、高度経済成長期における成人男女の性別役割分業が、投書の書き手の社会的立場として想定されているということである。特に、大学生は、サラリーマンや主婦になった経験はなく、家族などの身近な人間関係や新聞、テレビ、雑誌等のマスメディアを通して感じているイメージをもとに想定していると思われる。さらに、そのような役割分業に形容詞がつけられ、「忙しい」サラリーマンと「ヒマな」主婦というイメージが根強くある。具体的には、以下の判断根拠を紹介しながらみていくが、このイメージはあくまで高度経済成長期の成人男女の姿であり、女性の就業が高まり、兼業主婦が専業主婦を上回り、いわゆるヒマな主婦（かつてもヒマであったかどうか定か

でないが) などそれほどいない現在とは違っているという点が興味深い。時代の状況は刻々と変わりつつあるのに、意識はそれほど変わっていないことを示唆している例だと思われる。ジェンダー意識についても同様であろう。

3.1.1 語彙・文体・表現を通じたジェンダー意識

まず、語彙や文体に対して、どのようなジェンダー意識があげられているのかみていきたい。最初に語彙に対するイメージについてみる。

	男性	女性
漢字の使用	多い 熟語、漢語が多い	少ない ひらがなが多い
専門用語の使用	使われている 外来語、横文字が多い	あまり使われていない (使う場合、それほど知らないで使う) カタカナ英語が多い
難しい表現・言葉の使用	たくさん使われている 慣用的表現が多い	使われない 感情表現、擬態語が多い

上のまとめから、男性は漢字を使用し、専門用語を駆使しながら、難しい表現、語彙などを使っている。一方、女性は漢字をあまり使わず、感情表現、擬態語などをよく使っている。一概にどちらがプラス、マイナスイメージとは括れないが、男性の方は専門性の高い文章を書き、女性の方はそうではないというイメージが浮かんでくる。ここに、ジェンダーのステレオタイプが存在していることがわかる。女性が漢字を使うのはあまりよくないといわれた時代を越えてもなお、しかも、男女共に教育を受けてきた大学生にも存在しているというのはどういうことなのか、じっくり考えてみたい点である。

次に、文体・表現をめぐるジェンダーステレオタイプを紹介したい。ここでは、プラスイメージのもの(＋と表記する)とマイナスイメージ(－と表記する)のものや、男女で対照的なものを中心に整理している。

	男性	女性
文体	<p>「だ・である体」</p> <p>＋：力強い・野性的・迫力あり・簡潔・言い切り</p> <p>＋：社説のような文章・しっかりとした文章・きちんとしている・小論文的</p> <p>－：事務的な文・単調・箇条書きタイプ</p> <p>＋：ストレート</p> <p>－：とげとげしい・きつい・厳しい・辛辣・丸みがない・堅苦しい・押しつけがましい・命令口調・威圧するような感じ・反発的な口調</p>	<p>「です・ます体」</p> <p>＋：丁寧・ソフト・やわらかい・穏やか・あたたかい・かわいらしい・語りかけるような口調・細やかな配慮</p> <p>＋：分かりやすい・読みやすい・口語的表現・会話的表現・手紙のような雰囲気</p> <p>＋：形式ばっていない</p> <p>－：あいまい・遠回し・おとなしい</p> <p>－：嫌味っただし・ムズムズして気持ちわるい文章・くどい・ねられていない</p>

以上のような項目ごとに整理したものにまつわる感想を紹介したい。正解がわからない段階で全体を通して感じたことを気楽に書いてもらったものである。以後、(f)は女性の回答者、(m)は男性の回答者の感想を示す。時間的な余裕がないなかで行なわれたこともあるため、回答者の表現等がしっかりしていないものがあるが、原文のまま載せたい。

- ・です・ます調は女、だ・である調は男に感じてしまう。難しい表現があると男性のように感じてしまう。(f)
- ・語尾が「ですます調」だとどうしても女性のように感じてしまう。関係ないと思っても、やはりそう思えてしまう。(m)
- ・明らかに男性だと分かるのは多いけど、女性だと自信がもてるのはあまりなかった。「難しいことを言っているから男性」というのは偏見だけど、読むとどうしてもそんな感じがします。(f)

- ・トゲがあるような固い文章は男性っぽいと感じた。(f)
- ・「なるまい」女性が使う言葉ではないと思う。(使ってはいけないというわけではないが)(m)
- ・男性だと思われる文は黒っぽい。反対に女性だと思われるのは白っぽい。(m)
- ・同じテーマなのに男性、女性、そして年代までがなんとなく分かるのに驚いた。男性は力強く、女性はやさしい文体で自分を主張している。(m)
- ・書き言葉だと、ですます調はやわらかいニュアンスが女の人っぽく、である調が事務的で男の人っぽく感じた。(f)
- ・男—新聞記者風、女—ジャーナリスト風。(f)

上にあげた表からみえてくるのは、男性の文章は力強く、簡潔で、しっかりとした文章だが、命令口調だったり、威圧的な雰囲気もあり、きつく、かたく感じることもある。また、事務的な文になることもある。ちなみに、「小論文的」というコメントは、昨今、受験準備をしたことのある人ならではの発想であろう。

一方、女性の文章は、丁寧であたたかく、口語的表現、会話表現がところどころに用いられ、分かりやすく、読みやすいし、形式ばっていない。しかし、おとなしく、あいまいな表現があったり、よくねられていなかったり、はては、嫌味たらしく響くこともある。文体・表現をめぐるイメージは、まさに、今日の社会によくあるジェンダーステレオタイプを示している。例えば、〈力強い男とやさしい女〉〈きつい男と嫌味な女〉という二項対立的なイメージである。

さらに、上述した感想から解釈されるのは、少なくとも、新聞投書での書き言葉において、文体や表現をめぐる、ジェンダーステレオタイプを感じている人がいるということである。「関係ないと思っていても」「偏見だけど」「~のように感じてしまう」というただし書きをつけているのは、そうみてしまう自分に対する気づきであり、戦後、男女平等の中で教育を受けてきた者として、違和感を抱きつつ、自らの本音、イメージを表現しているものと思われる⁽²⁾。

3.1.2 内容・論理展開にみるジェンダー意識

ここでは、内容や論理展開から感じるジェンダーステレオタイプを紹介する。キーワードを中心に分類し、まとめてみた。判断根拠をみていくと、男性と判断するにも女性と判断するにも同じようなキーワードが登場してくる。例えば、「論理的」という判断根拠は男女どちらにも出てくるが、その単語のもつ意味、ニュアンスが違っている。以下、具体的にキーワードをいくつか取り上げ、男性、女性に対するニュアンスの差をみることで、ジェンダー意識をみてみたい。また、それぞれにつき、プラスイメージかマイナスイメージかでまとめていく。

	男性	女性
① 論理的 分析的 客観的	<p>＋：論理的・理論的に展開・理性的で前向き・筋道をたてて考えようとしている・説得力あり</p> <p>分析的・分析的に反省・問題を分析・適切な分析・冷静な分析・因果関係をはっきりさせている・破たんの原因をさぐり、自分なりに推理しようとしている・過去と今を比較・過去を鋭く振り返っている（→主婦とは違う）</p> <p>日本経済を客観的にみている・バブル時代のことを客観的にみている・客観的な事実を述べている</p>	<p>－：論理的でない・主観的・短絡的・感想文のような内容</p> <p>言っていることがよくわからないのでおぼさん</p> <hr/> <p>＋：論理的→高学歴の女性</p>
② 感情的	<p>＋／－：労働者の怒り・激しい感情・怒りを直接ことばにあらわしている</p> <hr/> <p>＋：感情があまり入っていない・落ち着いている・自分の感情をあまりまじえないで法的視点から物事をとらえている</p>	<p>－：感情的できつい・理論よりも感情論になりがち・情緒的・感情表現が多い・感覚的・感傷的・心理的・悲劇のヒロインになっている・「涙」に反応・ヒステリックな女にありがちな罪をいつまでもねちねち言っている感じがする</p>
③ 現実的	<p>＋：現実をよく見ている・現実的・現実性がある・現状把握をしっかりとっている・具体的な問題が取り上げられている</p> <hr/> <p>＋／－：ロマンチストな男性</p>	<p>－：非現実的・現実からやや逃げた発言・理想論・抽象的な話が多い</p>

④ 視点	<p>＋：公的・国家全体・社会全体を見ている、心配している・社会に関心がある・社会的な間違いを指摘している・大きな所（大蔵省）を問いただしている</p>	<p>－：視野がせまい・個人的なこと・身近なこと・日常生活のこと</p>
⑤ 批判 鋭 明快さ	<p>＋：責任を厳しく追及・シビア・辛口・鋭い批判・自分の経験を生かした鋭い批判・政府に対して強く批判・批判するだけでなく、自分から意見がいえ る・自分なりの意見をもっている</p> <p>＋：はっきり言う・ハキハキ</p>	<p>－：追及がない・自己主張がない（自分が傷つきたくない）・一方的な被害者だと言っているよう・自分に責任がないかのような話しぶり</p> <p>＋：批判しながらも礼儀正しい・とげとげしさがなし ＋／－：遠慮しつつ意見をいっている</p>
⑥ 発想 勢	<p>＋：男らしい冒険心・柔軟な発想・ポジティブな提案・解決策を提案・信念がある・先見性・達観したような</p>	<p>＋：大胆な発想・かけっばい意見・個性的・男性の場合、こういったぱっと思いついたアイデアを投書してまで出すことは少ない・柔軟な発想・前向き・次のステップを考えポジティブな感じ・自分は行動できる立場ではないが、信念を強くもっている感じ</p> <hr/> <p>－：安定志向・安定にこだわっている ・自分の利益にこだわっている</p>

<p>⑦ 専門知識</p>	<p>＋：専門的・専門知識にたけている・いる・株、不動産のことを知っている・経済に詳しい・かなり教養がある・金融関係の知識をもっている・金融関係の人・経済、経営関係の仕事をしている・自分が知っている事実</p> <p>内部事情をよく知っている海外をみすえた口調・アメリカのことを例に出している複雑なことを考えている</p>	<p>＋：キャリアで仕事バリバリ・インテリ</p> <hr/> <p>－：他人の意見の受け売り→年上の男性と結婚した世間知らずのお嬢さん奥様・新聞やワイドショーを見てこの投書を書いた→主婦っぽい・情報の豊富さがワイドショー並・報道による内容から自分の意見を言っている・株、不動産に関心をもつ女性は少ない</p> <p>内部事情をよく知らない・外部の人アメリカの話をもっと出して比べてしまうところ</p>
<p>⑧ 体験 仕事</p>	<p>＋：実感がこもっている・他人ごとと思っていない・自分の本当の体験をもとに述べている</p> <hr/> <p>＋：働き盛り・男の仕事気・仕事＝命・仕事熱心・ビジネスマンタイプ・こつこつとまじめに働いてきた・黙々と働いてきた・中小企業で働いて苦労しているからこそつっこみたくなる・その人自身も責任がついてまわるような立場にいる成人男性・中間管理職的な苦労・やとわれ者のつらさ・単身赴任を経験した人・経済的自立を常に考えている独立した人・税金をおさめている人・えらい人</p>	<p>－：他人ごとの・第三者的な立場・真剣さが感じられない</p> <hr/> <p>－：現実を知らない→働いたことがない・現場で働かない主婦・働いていない女性・もう就職はしない、または、する必要がないようだ・実際に働く会社員を外からみている→主婦</p> <p>(＋：郵便局は女性社員が多い)</p>

<p>⑨ その他 肯定的な もの</p>	<p>責任感・意志・自信ある・正義感・使命感・切迫感</p>	<p>気配り・あたたかい・ねぎらい・やさしい・励まし・女らしい気遣い・同情的・几帳面・細やかさ・女の人特有の強さ・落ち着き</p>
<p>否定的な もの</p>	<p>攻撃的・威圧的・乱暴な言い草・強気強引な意見</p> <p>へりくだった言い方をしつつ、えらそうな印象・自分のことをほめて人のことをよく言っていない・皮肉・自嘲的・自己正当化・知ったような口のきき方・評論家のように都合悪いことを水に流してしまうのはほとんど男性</p> <p>社会では規律通りに進まないこともあり、そこを社会でもまれている男性たちは、要領よく目をつぶる術を身につけている</p> <p>思い出話・未練がましい・後向き・老人くさい・酔ったおやじが愚痴を言っている・理屈っぽい</p>	<p>執念深さ</p>

以上の項目をさらに簡潔にプラス・マイナスでまとめ、それぞれにコメントしたい。

	男性	女性	コメント
① 論理的 分析的 客観的	+	+/-	論理は男性のもの。または、男性の論理が論理とされる。 女性に対しては、「おばさん」か高学歴の女性かの分裂的イメージがある。
② 感情的	+/-	-	感情は女性のもの。ヒステリックになりがち。 また、感情の分業として、男性は怒、女性は悲を表現する。
③ 現実的	+	-	男性は現実的、女性は現実から逃げている。
④ 視点	+	-	男性は公的、女性は私的なものを扱う。視点の分業体制。
⑤ 批判 追及 明快さ	+	- +/-	男性ははっきり、しっかり批判し、女性は遠慮しつつものを言う（=女らしさ）。
⑥ 発想 姿勢	+	+/-	男女とも大胆な発想をするが、女性は一方で安定志向もあり、分裂的イメージがある。
⑦ 専門知識	+	+/-	男性を仕事をしているからこそ、専門知識を持っているが、女性は仕事をせずに、ワイドショーなどから情報を得ており、受け売りにすぎない。女性に対しては、キャリアウーマンか主婦かの分裂的イメージがある。

⑧ 体験 仕事	+	-	男性は仕事をして、苦勞している。体験からものを言っている。一方、女性は、働かないため、他人ごととしてしか考えていない。また、女性に対して、主婦か、郵便局で働いているという分裂的イメージがある。
⑨その他 肯定的	人間として	女らしい	男性の方の肯定的なものは、人間として評価できるものであるが、女性のそれは、女らしさとしても評価されるものである。
否定的	男らしさ (特に中年以降の男性にみられるもの)		男性の方の否定的なものは、男くささにも通じるものであり、特に中年以降の男性にみられるものとして想定されている。女性の方は、他の項目で十分に否定的にみなされている要素があげられているので、ここであえてみるものはない。
女性がプラス評価されるものと男性がマイナス評価されるものが対をなしているように思われる。			

次に、内容・論理展開をめぐる全体的な感想を紹介する。最初の番号は、上であげた項目の番号である。

・①+②

男性は物事に対して冷静だと思う。反対に女性は感情的に行動してしまうことが多いと思う。(f)

・①+②+④

男性っぽいと思うのは、論理的でむだがない文章。女性っぽいのは感情的で家族・家庭内について深く考えている。(f)

・④

男性は社会的観点、女性は個人的観点から書いていると思われる。(m)

女の方は自身の身のことを、男の方は自主廃業の原因などの問題を提示している文かと思った。(f)

④+⑧

男性の投書は、自分の労働環境、体験をもとに、山一証券の責任を十分に述べているが、

女性の投書は身近な人がいた場合の心配事にすぎない気がする。(m)

⑤

どうしても丁寧な文章だと女性、厳しい意見は男性のものに思えてきます。(f)

⑧

「仕事を一生懸命するのは男性」というイメージが自分の中にあるようだ。(f)

以上から、語彙・文体・表現に対するものと同様に、内容・論理展開の方法に対しても、男女に対するイメージが存在していることが分かる。世間によくみられるイメージが、若い人にも深く浸透しているように思われる。典型的なジェンダーステレオタイプは、一家の大黒柱として忙しくも仕事に精出し、それゆえに専門性も高く、論理的に主張をきちんとしてできるサラリーマンと、家庭内で家族の世話をこまめにしているため、視野がせまく、また、ヒマをもてあまして、ワイドショー等をよく見ている、世間知らずで感情に左右されがちな主婦である。しかし、やさしく、気配り上手という女らしさを持っている。また、女性は、一方で、キャリアを積んだ、働く女性、またはインテリ女性という分裂的なイメージもある。

女性の主なイメージが、ヒマな主婦、そしてワイドショーにうつつをぬかしている主婦というのがどこから来たのであろうか。「専業主婦の憂うつ」という特集記事で、ある専業主婦が独身の女友達から「主婦ってひま人の代表ね」「ワイドショー毎日見ているんでしょ」と言われたことがあると報告している⁽³⁾。午前中、または昼間のワイドショーは確かに家庭にいる人向けに制作されている。そして、番組を盛り上げるために視聴者を参加させることが多いが、その会場に来るのが主婦が多く、街頭インタビューの相手も「台所改造」など家の改造などの相談相手も主婦がもっぱらのことがある⁽⁴⁾。しかも、その「主婦」は、何も分からない、または、ただそこにおいて適当なことを言っているというイメージでしか存在できないように結果的に描かれてしまう。賢い主婦はいるが、家庭内の家計をやりくりする程度である。そして、その「主婦」に対してアドバイスしたり、説教したりするのは男性が多い。このようなパターンは、ワイドショーだけではなくいたるところに存在する。しかし、このようなワイドショーに「主婦」以外の人、たとえば、サラリーマンなどが登場してきても同様なイメージ、つまり、何も分からない、ただそこにおいて適当なことをいうイメージにしかならないと思うが、仕事で忙しいため対象とならず、もっぱら「主婦」向けに制作することになるのである。このようなワイドショーにみられる、視聴者として期待され、そして、「奥様」としてもはやされながら、時にもちあげられながら、実は馬鹿にされている存在が、「主婦」なのである。そのようなイメージが、若い学生にも十分に浸透しているし、特に女子学生も同性である主婦に対してマイナスイメージをもつことになるのである。そういう意味においても、マスメディアは、このようなイメージ形成に大きな力を持っているといえる。

さらに、マスメディアとの関係で言うならば、女性に対する先にあげた分裂的イメージ

も、自分の身の回りの具体的な場面で実感されているというよりも、広告やドラマなどに、しっかりと描かれてきたパターンの一つである。スーツ姿で眼鏡をかけた仕事バリバリのキャリアウーマン⁽⁵⁾とエプロンがけの主婦、オフィスで仕事をしている女性と飲み屋で働いている女性、高学歴の女性とそうでない女性、若い女性と中年以降の女性、結婚している女性（さらに、金持ちの奥様風の女性と生活に疲れている女性に分裂）とシングル女性（さらに、結婚できるがしようとしないう女性と結婚したいのにできない女性に分裂）等、数えあげればきりがないうほど、女性は、一人の（統一した）人間としてではなく、分裂的に表象されている⁽⁶⁾。男性の場合も多少分裂的に描かれる傾向がなくはないが、例えば、仕事に燃えるエリートサラリーマンが子煩悩の父親として登場してもあまり違和感なく表象され、受け入れられる。しかし、女性の場合どうであろうか。実際、サラリーマンにも主婦にもいまだかつてなかったことのない、主に学生が、上でみたようなイメージをしっかりとっていることに、賃労働のみが評価される現代社会の矛盾をみせつけられる思いがする。

さらに、後で紹介するが、回答者である女性が、女性に対してマイナスイメージでみてしまっているという悲しい状況も今回の調査で明らかになった。男女平等、男女共同参画社会がうたわれている社会の中で育ってきても、女性が同性のことを、男性に比べ、劣っているとみなしてしまうことに、女性の抱える矛盾がみえてくる。自分の将来のイメージが否定的なものに強く支配されているとしたらどうだろうか。

また、女性をめぐる、上の項目⑤やその他で、肯定的なイメージをもって指摘されている、「気配り」や「やさしさ」などは、女らしさに通ずるものであり、単純に手放して肯定的なものとして受け入れられないものである。世間では、そのような女らしさを表現できないと、女らしくないと非難される、いわば規範となっているからである。男性をめぐる、特にその他あげられている否定的なイメージのものは、男らしさとして一定の評価を受け、「男だから」と容認されるものとするならば、女性に対する肯定的なイメージと対をなしていると考えられなくもない。つまり、男性の場合、否定的なイメージでも、男らしさ、男くささとして容認されるものなのである⁽⁷⁾。（注：「マザコン」のもつイメージは、過保護でやり手の母親に従順な息子というイメージがあり、ここでも、母親である女性は否定的な存在として提示されている。

感情表現に関しても、今回の調査から、興味深い点、つまり、感情の分業が存在していることが分かった。男は怒り、女は悲しむという構図である。これは、このような分業があるというよりも、男には怒りが、女には悲しみが許されるということを示している。キャロリン・ハイルブランは、「他のすべてのタブー以上に女に禁じられていたのは怒りだった」と述べている。「怒る女」はまだまた特別であり、異常であり、そのような場合にはヒステリックというレッテルをはって、その怒りの原因、理由を探らずすまそうとする。つまり、男の怒りには、なんらかの理由があると共感し、女のそれには、一時的な感情に左右されてのこととして迷惑がる。また、男が涙を流す場合も、余程のことがあると同情

され、女の涙よりも重く解釈される。世間に存在しているこのような意識が、今回の調査からも浮かび上がってくる。

このような書き言葉における内容・論理展開をめぐるジェンダーステレオタイプについて、牧野成一氏は、論文（1979）において、アメリカ人学生と日本人学生を対象に、書き言葉をめぐる性別判断調査を行ない、アメリカ人に比べ、日本人の方に強くステレオタイプ観念があることと結論づけている。アメリカ人は同意せず、日本人が同意しているそのステレオタイプ観念とは、女性の書き言葉について、論理性に欠け、感性的・主観的であり、どうでもいい細かいことを書く傾向があるとするものである。今回の調査においても、20年前に行なわれた牧野氏の調査結果に共通するものがあり、20年たった今でも同様なジェンダーステレオタイプが存在していることが分かる。

3.2 現実認識

ここでは、3.1で整理したジェンダーステレオタイプばかりではなく、特に男女関係をめぐる現代社会の実態（矛盾・問題）をしっかりと把握している判断根拠を紹介したい。ここでは、主に個人的事柄に言及している投書をもとに語られている。繰り返すが、ジェンダーステレオタイプと接近するものがあることを確認しておきたい。

まず、男性の投書③⑥を通して、表現されたコメントを紹介したい。③では、投稿者の体験として、「23年間勤めた中小メーカーを体をこわしたのが原因で退職し、現在の会社に採用された」こと、当時、40歳過ぎでの再就職の大変さを語り、山一証券の社員に対して過去のプライドなど捨てて、本当のプライドをもって生きぬいてほしいと結んでいる。この投書に対して、書き手を男性とする根拠には次のようなものがある。

<長く働ける、中高年でも再就職できる>

- ・23年間も長く勤めている→女性で長く続けられる仕事はすくなかったはず。
- ・体をこわすまで働く→家族を養わなければならない。
- ・中高年で再就職している→中年女性は採用しない。

女性は主婦になる人が多く、パートかアルバイトぐらいしかできない。

40過ぎた男性ならばなんとか採用されるが、悲しいことに今の社会では40過ぎた女性はやとってくれない。

- ・プライドや地位など、まだまだ、男性優位の社会の中でこのようなことに関心があるのはやはり男性だと思った→女性は最初からプライドなどにこだわってられない。
- ・働かないと生きていけないということを考えているのは男、まだ、上の命令に従うのは男。

つまり、これらをまとめると、勤続年数が長く、40歳過ぎで再就職できる状況にあるのは男性であるという認識がある。

⑥では、投稿者は、約20年前、信用組合の役員をしていた時、不良債券の処理のため、3,000万円相当の私財全部を提供し、退職した。「当時、私は、42歳、子供3人を抱えて、死にものぐるいで働いた」と語っている。この投書に対して、書き手を男性とする根拠に次のようなものがある。

<20年前に役員になれたこと>

- ・20年前に、信組の役員になれるのは男性ばかり。こういう立場（責任をもつ）にいなような女性は、日本では増えつつあるが、まだ欧米に比べて少ないと思った。
- ・今から20年位前は、「男は骨をうずめるつもりで入社。女は仕事をするにしても結婚してやめる」が主流だった。
- ・書き手は奥さんという存在があったからこを、死にものぐるいで働けたのだ。もし、片親としての立場も背負っていたら、仕事どころではなく、家事にとらわれた身だったと思うから。
- ・私財を3千万ももっている。
- ・家庭の話を自分の足かせのように引き合いにだすから。

これらをまとめると、20年前に役員になれたのは男性であり、家族がいるため、「死にものぐるい」で働かなければならなかった。と同時に、家事育児は奥さんがしていたことが予想されている。

以上、男性の投書で男性と判断した根拠は、性別役割分業体制の中で、長く勤め、または、中年以降に再就職できるのは男性がもつぱらであり、女性は結婚や出産を機に退職し（させられ）、家事育児に専念し、その後はせいぜいパートかアルバイトとしてしか雇われないという状況を認識している。

次に、女性の投書②⑦をめぐるコメントを紹介したい。まず、②では、投稿者は、かつて山一証券に勤めていたためか、破たんのニュースで「涙」する。かつての同僚、友人たちのことが心配で、電話のやりとりをしたところ、意外に元気であった。「みんな、本当に強い」と感じ、「メソメソする」自分を恥ずかしく思うほどであった。この投書に対して女性と判断する根拠として次の2点あげられた。

<自分が泣くことを表現できる>

- ・泣くことを恥ずかしいと思っていない。
- ・男性は、たとえメソメソしたとしても、こういう所（投書）で発表しないと思う。
- ・やけに泣き虫なところ。

<友達が皆女性である>

- ・子持ちの主婦が昔の男性の友人にわざわざ電話をかけてくることはあまりない。
- ・親しい人が女性だから。
- ・恐る恐る電話をする相手が異性だとは考えにくい。
- ・わざわざ電話してまで話すのは女性。
- ・プライベートな相談をするのは女性。

つまり、泣く行為は男女ともにあるにしても、泣いたことを（堂々と）書けるのは女性であるとする点と、結婚退社したであろう女性が、親しく連絡をとり、また、プライベートなことを相談しあうのは女性であり、異性にはしないだろうとする点である。

投書⑦では、山一証券の契約社員である母について語っている。突然の破たんに落ち込みが激しい状態、地元で仕事している契約社員の立場のつらさ、解雇者に含めてもらえない不安定な身分に同情し、「逆境にめげずに頑張る」ほしいとエールを送っている。この投書に対して、女性であると判断した根拠は次の通りである。

<母のことを理解するのは娘>

- ・母を理解している、心配している娘。
- ・母親が仕事の話をお子にしているようだから、娘相手の方が話しやすいのではないかと。
- ・女性に対する差別に憤りを感じているように思えた。／弱者の立場を考えているので女性。
- ・身内を通して社会を語っている。

つまり、身内のことを語り、同性である母のつらさに共感できるのは娘としての女性であるという認識をもっている。

以上、女性の投書に対して女性と判断した根拠は、涙を流したことを表現できる点、既婚女性が電話で連絡しあい、プライベートなことを語れる相手は女性であり、また、身内である母のことを気遣えるのも娘だからこそと認識している。性別役割分業体制において、家庭・家族のことを心配するのは女性の役割として期待されてきたものであり、また、同性との交流を通じて、社会をみつめている状況を把握している。既婚女性が異性と気軽にかかわることのできない社会における男女関係、「男は人前で泣くものではない」という前提（または、涙をめぐって男女が異なった解釈をされる社会）⁽⁸⁾、男性はプライベートなことはあまり相談しあわないという社会状況を、回答者が把握していることが分かる。

3.3 ジェンダーステレオタイプに対する問いかけ

ここでは特に、3.1であげたようなジェンダーステレオタイプに対して疑問をなげかけているものがある。今回の調査の中で、3.1とともに、筆者にあらたな気づきをあたえてくれたものであり、ここに紹介したい。

- ・読む限りでは、男女の判断が出来なかった。客観的な視点から、そして、日常的に自分が不満、不思議に思っていることなどを述べようとする。「執念深さ」を追求する態度から、女性の意見かもしれないとも一瞬考えたが、それは男女の性別に対しての偏見だ。男性でもそういう人はいるだろうから、一概に判断できないと思った。(f)
- ・女性かな、と最初は思った。同期の友人が女性でここまで親密な仲ならきっと女性なのだろう。女性で気心が知れているからこういった気遣いをされたり、正直に気持ちを打ちあけてくれるのだろうと。しかし、これもどうかと思った。男女間に友情は存在しないのか、ということになれば、100% YESとは言えないだろう。(f)
- ・これも最初は男性かなと感じたが、立ち止まって考えてみた。「何十年も勤めた」とか「中高年の再就職は厳しい」とか「山一社員は男性の方が多そう」という自分勝手な解釈。これでよいのか？考えれば、立場は女性も同じだ。「プライド」を賭けるのは男性だけではないはずだ。(f)
- ・このように専門的な意見を投じているからきっとそれなりのキャリアがある人に違いないと思い、男性にしたかったのだが、女性がキャリアを持って何が悪いと考えてしまった。現在の日本における企業の重役、社員の男女比をみるとどうしても男性の方が比率は大きいのでつい思い込んでしまった。(f)
- ・「子供3人を抱え」：女性の方が多くの人に希望を与えてくれるから。(f)
- ・「私財」「子供3人を抱え」という言葉で、漠然と男性かなとも考えたが、、、。自分が女であるのに女性を偏見の目で見ていることに腹が立つ。(f)
- ・男にしては柔らかい感じ、専門的な話で男かな？とも思うが、そういう女のひとであってほしいので、あえて女の人にする。(f)
- ・男女問わずに持てる意見であるし、文章表現も男女の判断が出来ない。(m/f)
- ・意見を率直にのべた文章であり、男女どちらにもありうる意見なので判断できない。(f)
- ・同情的文章(身内だからかも、、、)を書く時点で女性かなとも考えたのだが、それでは男性が心優しい立場は一体どうなる。(f)
- ・文章全体の印象が丁寧で女性っぽい、そういう男性が書いた可能性も考えられる。(f)
- ・おそらく郵便局にかなり関係がある人物だと思うけれど、相場トレーダーには女性も多くいるし、、、(m)

- ・男はpublic的なものごとに対して自分のなげきや願いの文を書く。この文(⑧)を書いたのがもし女なら、僕はそんな女にほれる。(m)

ここには、「女だから～」 「男だから～」 といって、つまり世間の常識によって一概に決めつけられないという、ジェンダーステレオタイプに対する問いかけがある。現実、世間の決めつけ、それに対する自分の意識、それぞれの間を行きつ戻りつ、あれこれ考えている回答者の姿がみえてくる。書き手の性を判断する際、最初に思い浮かぶ性に対して、他方の性についてそうでないと言いきれるのか、言いきってしまっているのかと自問する。または、こうあってほしいという願いも判断を左右する。特に女性回答者にこういった思いが強くなるように思われる。さらに、男性回答者の中には、そのような発想する女性にほれるだろうとまで表明しているものがある。いわゆる「女らしさ」とは距離をおいた発想の持ち主の女性にほれるという、これまでの回答にない、新しい男性を予感させるものまででてきた。

ここであげた意見のほとんどが2001年度の調査において出されたものである。特に女性の回答者からの意見であることを思うと、現在女性のおかれた社会的状況に対する違和感とオールタナティブな生き方を求める女性の思いをみるようである。筆者は、ここまで回答してくれるとは思っていなかったこともあり、彼女ら、彼らの発想に、驚きとともに、将来の明るいきざしをみる思いがする。このような調査結果を無駄にしないように、調査・研究に対して、真摯に取り組んでいかなければならないという決意を強くする。

3.4 全体の感想

これまであげなかった全体の感想について紹介したい。繰り返すが、この調査で紹介する感想は、書き手の性が分からない時点でのものである。

3.4.1 書き手の性は分かる／分からない

今回の調査は、1999年度のものも含めると、総勢557名を対象に行なったが、全投書の書き手の性を正解した回答者は、20名にも満たない。つまり、文章から書き手の性を全ていい当てるのは至難の業なのである。筆者自身が行なっても全ては当たらないと思う。この状況において、書き手の性が分かると感じた回答者と分からないと感じた回答者の感想を紹介する。

<書き手の性が分かる>

- ・始めはちっともわからないのではと思ったが、けっこう文を読むだけで男女の区別がつくものだなと思った。(f)
- ・匿名の文章を読んでみて、男らしさ、女らしさがにじみ出ている、書き方にも男女の

- ちがいがはっきりしていることを知った。(m)
- ・よく分からないものはなく、私は基本的に男性だと思って読んでいたと思った。(m)
- ・同じテーマなのに男性、女性、そして年代までがなんとなく分かるのに驚いた。(m)
- ・女性は感情的で、男性は事実を淡々と書いているばかりではないと思うが、新聞の投書欄を読んでいたのもそう感じていたので、強引とは思いつつ、文章の内容だけで選んでみました。(f)
- ・何となくではあるが、文章を読んでいて、どこか男性らしさ、女性らしさを感じた。(f)
- ・個人的な職歴、経験から男女の判別ができる場合がある。(m)

<書き手の性が分からない>

- ・意外にわからなくてビックリした。(f)
- ・文面から性別を読み取るのはとても大変なことが分かった。(f)
- ・文の調子を主にみてきたが、繰り返し読めば読むほど分からなくなるような気がした。実際の投書を読んでも年齢によって変化があるので余計区別がつかなかった。(m)
- ・自分のことが書かれていない文章で、表現、内容から判断するのは難しいと思った。女性の社会的立場も関係しているところもあって、女性の方がわかりやすかった。(f)
- ・文章の構成や内容だけでは、男女の区別をつけるのは難しいなと思いました。(f)
- ・語尾だけでは男女の判断は難しいと思った。(f)
- ・多くの文章が、男性とも女性ともとれて判断が難しい。「～ます」「～ません」という表現だから女性、「～だ」「～である」だから男性とは簡単にはいかないと思う。(m)

分かると判断した感想も分からないと判断した感想も共通に言えることは、個人的事柄が書かれていると分かりやすいということである。これは、今回の判断対象として山一証券自主廃業関連であることが大きく影響を与えているだろう。また、当然のことながら、回答者は、書き手の性を自分の性にひきつけて考える傾向にあることが分かる。

また、分かると述べているものは、「なんとなく」分かるというのに比べ、分からないと述べているものは、「読めば読むほど分からない」としている。どちらの感想も実感だろう。ただ、微妙ながら両方の感想が示唆していることは、なんとなく、どこか「らしさ」を感じるが、つきつめてどちらかと問われると、その根拠が危うくなってくることを意味しているのではないだろうか。今回の全ての投書の書き手の性を当てることが至難の業であることから言える。文章表現ですら根拠にするには、不十分に感じられている。「です・ます体」だから女性とは言いきれない社会にあることは確かである。女性がズボン

はくことが道徳的に許されなかった時代には、ズボンをはいている人を見れば、迷わず男性と判断できたのに、女性もファッションの一つとしてむしろズボンをはくことが歓迎される今日、ズボンをはいている人を見て、自信をもって男性とは言いきれないだろう。それと同じことが、書き言葉における文体や語彙、表現、内容にもあてはまると言えよう。ことばがどこまでジェンダーを表す象徴として存在しつづけるか、今後見続けていきたい。

3.4.2 ジェンダーへの気づき、または葛藤

3.4.1では、書き手の性が判断できたかできないかを中心とした感想を紹介したが、ここでは、回答者のジェンダー意識への気づき、または葛藤を述べていく。

<先入観・偏見>

- ・具体的根拠がなくても「なんとなく」である程度の正答は得られると思う。それはやはり「書き手」「読み手」の先入観があるからだと思う。読む側はもちろん、書く側も長年生きてきた中で、性別にあった表現というものを知っている。(m)
- ・女性の文章はやわらかくて温かく、男の文章は固いという先入観をもっている感じがした。(m)
- ・自分の男女に対するイメージが回答に影響を与えていることを実感した。(f)
- ・自分の中で固定観念がかなりあることに驚いた。(f)
- ・自分の判断基準を考えると、男女それぞれに変に偏見を持っているかもしれない。(m)
- ・同じ新聞の読者の投書でも一般的な意見から、個人的、個性的な意見まであっておもしろいと思った。女性について触れてあったり、すごく個性的な意見だと、女性の意見じゃないかと思ってしまうのはなぜだろう。意識してなかったけど、私の中にも「女性はこうで、男性はこうだ」というような偏見があるのかもしれない。(f)
- ・女と判断した方は、“人”に関する投書が主であり、男と判断した方は、“会社”、あるいは、“責任”を問題にした投書である→僕のイメージの作りあげた分類にすぎないが。(m)

<こんなことでは>

- ・男性 or 女性という判断理由を書きながら、これは大変な「偏見」であるとしかいいようがないと思わず苦笑してしまった。例えば、男性：理性的、論理的 女性：感情的、直観的。女性管理職が増えている現在、あまり理由にならないかも。アメリカならヒンシュクものですね。(m)
- ・男性か女性か判別は難しいと思った。語尾か役員だからとか、結局、自分の男女の価値観にあてはめてやっている。言いまわし等で判断するのは良いと思うが、役員だか

らと社会的立場から男女の判断するのは、男女平等がさげばれているこの時代においてどうかと我ながら思う。(m)

- ・理屈的なのと感情的なのがあるが、どちらも好きではない。自分で男女のカテゴリー作っていたのが情けないなど。(m)
- ・自分ではしていないつもりだが、男女差別をしているのかもしれない。(m)
- ・「です・ます」が女性、「だ・である」が男性と無意識でとってしまう自分に気付かされました。また、30年後にこのような問題を出したら、また、変わってくるでしょう。(専門知識、職種の男女均等化によって)(m)

<葛藤>

- ・私の性別による偏見をたしかめられているようだった。ただ私は、このような偏見をなくしていきたいと思っているが、社会がそうなのだからこのように判断した。(m)
- ・私の考える文章の内容は、客観的か主観的か。そして、男性は視野が広く、国民全体もしくは、山一自身のことを書き、女性は自分、もしくは自分の身の回りのことしか考えていないということです。これにもかなり私の主観が入っているのですが、これはやはり私が女だからなのでしょう。(f)
- ・(この調査に)とても抵抗があった。女性=客観性に欠け、感情的な存在として考え、男性=冷静、客観的として考えるのが嫌でした。そして、事実ではないと知りながら、どちらかを選ばなければならないという時、こうなってしまう。(f)

以上、列挙した感想は、今回の調査の意義や問題点を率直に表現されているため、筆者があえてコメントを付け加える必要はないように思われる。このような感想に出会うと、筆者も機を引き締めて調査・研究していかなければならないと感じる。今回のような調査は、やりっぱなしではいけないと反省し、調査後きちんとフォローしてはじめて調査となることを思い知らされたコメントばかりである。<こんなことでは>という項目は、たまたまであるが、男性回答者のものばかりとなった。男性の中には、女性差別の現実を容認しているわけではないと感じている人がいる。調査者である筆者が女性ということもあるだろうし、加害者的な立場に置かれる居心地の悪さがこのようなコメントになっていると思われる。また、この調査が、<葛藤>で紹介したように、回答者の中にある、ジェンダーをめぐる葛藤を無理に引き出し、「平等」という(美)名のもとに自己反省をせまってしまう結果を導いてしまったかもしれない。また、女性に対するマイナスイメージを同性である女性が受け入れてしまっているという意識に気づくことほどつらいことはない。長年かけて意識的にも無意識的にもしみ込んできたものを見つめ直すには、それと同じか、それ以上の年月が必要だろうし、その作業は、それほど簡単なことでない。現実の社会がジェンダーを支え、問い返すような発想を歓迎しない中で、自身を見つめる目をもつというのは、決して楽なことではない。自分の中にある縛りを解きほぐすためのきっかけづくりと

しての、本調査・研究を実のあるものにするためにも、調査後のことをきちんと考える必要があると、全体の感想から痛感した。

3.4.3 その他の感想

今回の調査では、以下にみるような興味深い感想にも出会った。

- ・私もたまに投書していて、、、でも、「読まれる」言葉のことって、考えたことがあまりないと思います。(f)
- ・同じ「です・ます調」でも雰囲気違っていたり、印象がかなり違っておもしろかった。(f)
- ・手書きの方がワープロよりも分かりやすい。(m)
- ・どの投書も社会人の文章なので、自分も就職して社会人になればもっと見分けがつかせようと思いました。(m)

投書における書き言葉をめぐって、回答者の中には、このような思いを抱いた人がいる。それぞれの感想は、今後の調査に活かしていきたい。さらに、現代ならではの意見も出されている。それは、投書⑥をめぐって、家族関係のとらえかたにかいまみえる。「当時、私は42歳、子供3人を抱えて、死にもものぐるいで働いた」という記述について、次の解釈がされている。

- ・男か女か分からないけど、シングルマザーかシングルファーザーだと思う。裸一貫になったときに、子供3人と妻を抱えてとか書くのに、パートナーのことについてふれていなかったから。(f)
- ・同伴者と離婚したと考え、子供をひきとるのは女性が多いから。(m)

1.2.2で示したように、投書において、男性は女性ほど身内のことについて触れていない。さらに、男性は子供については引き合いにだすが、妻のことはあまり言及しない。この投書の投稿者は63歳であるため、20前後の学生とは、家族関係への言及について、異なった解釈をしているように思われる。「シングルマザー」「シングルファーザー」、または、「離婚」という語彙がでてくるのも、現代の家族関係の変化を示していると思う。

3.5 「ジェンダー・フリー」とは：ある感想をめぐって

ここでは、今回の調査の意味について、筆者に気づきを与えてくれた感想を紹介し、説明を試みる。それは、次の感想である。

性別を当てようと「らしさ」を考えるとすることは、それだけ「らしさ」をもっているということ？
むしろ、すべて判断不明の方がジェンダー・フリーなのか。まさか。

この感想によって、これまで漠然としか考えてこなかった今回の調査の意味を問い直すきっかけをもつことができた。この感想がいわんとしているのは、性別判断調査において、書き手の性が分からない方が、意識として、ジェンダーにとらわれない、いわゆるジェンダー・フリーの発想の持ち主ということになるのかという鋭い指摘である。

今回の調査・研究の目的・意味は、投書という書き言葉の書き手の性別判断をする作業を通して、回答者の中にあるジェンダー意識をめぐる本音を引き出し、その意識について考えるきっかけづくりをすることである。だからといって、ジェンダー・フリーの発想の持ち主であれば、投書の書き手の性が判断できない（または、してはならない）ということの意味しているものではない。ジェンダー・フリーとは、ジェンダーが生きていく上で縛りとなっている社会において、ジェンダーによる縛りが認識でき、矛盾としてとらえられること、さらに、そのジェンダーから自由になろうとする志向（距離をおくこと）ととらえたい。ただし、後者は、個々人がそれぞれの場で実践していくには相当の努力と犠牲がともなうものであることに違いない。矛盾に気づいても、オールタナティブな生き方が念頭になれば、気づかないでいる方が楽であるし、従来の路線にそって生きざるをえないというのが実態であろう。つまり、ジェンダーから自由になろうとして、ある女性が「女らしく」振る舞わなければ、まわりの人から忠告されたり、距離を置かれたりして、彼女自身が生きにくい状況に陥ってしまうことが往々にしてある。一人一人、それぞれの場で実践していくことによって歴史が動いてきたことは確かであるが、そればかりでは、事はうまくいかないことも確かである。ジェンダーを維持する要因や体制の根本を取り除く努力もしなければならないだろう⁽⁹⁾。

今回の調査は、前者のジェンダー意識に気づく作業の一つとしてとらえている。現実社会がジェンダー・フリーとなっていない以上、投書には書き手のおかれている社会的状況、立場が反映されていてもおかしくない。したがって、書き手の性の予想がつくことは、読み手も含めた書き手の置かれている状況（矛盾）を認識しているということになり、必ずしも、読み手がジェンダーにとらわれているといえない。3.2であげた判断根拠はまさに、その社会状況を把握していることを意味している。一方、3.1でみたような判断根拠、つまり、「論理的だから男、感情的だから女」という決めつけをもって、書き手の性を判断している場合には、ジェンダーを内面化してしまっている可能性が高い。このような決めつけは、回答者自身を縛ってしまっているものであり、将来に向けたジェンダー・フリーの発想にむけて、ぜひ気づいておきたいものである。もともとジェンダー・フリーな人が

いるとしたら、その人は今回の調査において投書の書き手の性を判断できないかもしれない。しかし、それが、果たして、現代の日本社会における現実を認識していることになるかは疑問が残る。逆説的だが、そのようなジェンダー・フリーは、むしろ、現実の状況を把握していない鈍感さに通ずるものかもしれない。

ジェンダー・フリーとは、ジェンダーとは何か、ジェンダー・フリーとは何かを、時代の変化の中で、常に考え続けていく精神のことだと筆者は考える。

4. 新聞投書を利用したジェンダー意識調査の意義

4.1 本音の表現の場として

今回の投書の性別判断調査のきっかけはごく些細なことであったが、調査の結果をみるうちに、ジェンダー意識の気づきのきっかけとして役に立つのではないかと考えるようになった。意識調査は、政府や地方自治体をはじめとして、様々なレベルで行なわれている。具体的にいえば、性別役割分業に関する意識調査において、例えば、「男は仕事、女は家庭」の考え方についてどう思うか問う質問があると、答え方は、「賛成する（同感する方）、反対する（同感しない方）、どちらともいえない」などいわゆる賛否選択回答法がとられている。戦後の日本社会において、男女ともに、確実にこの考え方に反対する方向になってきているという調査結果がある。総理府『男女共同参画に関する世論調査』（平成7年）によれば、同感しない方は、男性は40.2%、女性は53.9%である。したがって、意識としては、男女は性役割から解放されてきたかのように感じられる。しかし、そのような意識とはうらはらに、男性の家事時間をみてみると、総務庁が行なった1966年段階の『社会生活基本調査』によれば、共稼ぎであろうがなかろうが、男性は、1週間に家事を20分から27分程度しかしていないという実態もある（1日4分程度にしかない）。女性の家事時間が平均7時間を越えていることと合わせて考えれば、あまりにも落差が激しい。これは、本音と建前のギャップを示しているように思われる。建前は男女ともに「仕事も家庭も」という発想に賛成しながら、本音ではなかなかそうっていない状況である。このことを一概に男性が家事・育児をやりたがらないとするのは短絡的すぎるが、男性側の本音として家事・育児をどう感じているのかこのような調査だけではつかむことができないことは確かであろう。また、昨今、ますます注目をされてきたテーマである夫婦別姓問題についても同様である。夫婦別姓に賛成する人は、静岡市の調査（平成13年）によれば、夫婦別姓に賛成する者（やや賛成も含む）が、全体で15.4%（男性13.1%、女性17.3%）いる。しかし、厚生省が行なった1997年段階の『人口動態統計』によれば、夫の氏にした者が97.2%、妻の氏にした者が2.8%である。調査に4年の開きがあり、地域も異なっているため、単純に比較することはできないが、世間の注目をあつめている夫婦別姓問題も、実際結婚にあたってどちらの姓が選ばれているかみてみるとはつきりする。このような差別に気づいたある女性が結婚することになり、パートナーに姓について相談したところ、「最後のわがままだと思ってほしい」と言われ、やむなく夫の姓にしたと語っていた。一般論としては（建前）受け入れるが、自分のこと（本音）となるとなかなか受け入れられないということの例である。戦後、日本社会において、表立って男女平等に反対する（できる）人はあまりいなくなってきたが、具体的なレベル（家庭、職場、教育現場等）では、依然として、男女不平等が罷り通っていることが少なくない。断っておくが、このような意識調査が無効だとか無駄だと言っているわけではない。多くの人に広く意見を求める場合には、このような方法をとらざるをえないし、それはそれで意義あるものだろう。

投書を利用した今回の調査は、一般論を調査するのではなく、本音を率直に表現する場として活用できるのではないかと考えている。繰り返しになるが、調査はいたって簡単で、個人情報をつせた投書を読んで、書き手の性別を推測することである。そして、その判断根拠を語彙・文体・内容等自由に記述してもらおう。投書を読み、理解し、解釈し、書き手の性を推測することは、読み手の人生体験を総動員していかなければならない能動的な行為である。単語一つとってみても、書き手の込めた思いをくみとるは、読み手が想像をたくましくしなければ無理だろう。「学校」という単語を考えてみても、そのもつニュアンスが年齢、性、地域、現在の立場などでも違ったものとなるだろう。日曜日でも行きたくなるほど楽しい思い出しかない人と「学校」という単語を聞いたり、見たりするだけでも嫌悪感を抱く人など様々である。それらの思いをあれこれ思案しながら、解釈していく作業が理解するということである。

また、この調査に使用する投書はとりたてて性差別について語っているわけでもなく、回答に点数をつけるわけでもなく、無記名で自由に書いてもらうため、回答者も構えることなく、肩の力を抜いて、回答することができると思われる。さらに、このような作業をかつてしたことなかったためか、新鮮な気持ちで、推理探偵家気分での性を推測していくメリットがある⁽¹⁾。

最後に付け加えるとするなら、今回の調査を継続して行なうようになった理由は、授業において、性差別問題、ジェンダー問題についていろいろと工夫して話しているつもりでも、受講生である学生の中には、抵抗を感じたり、距離をおいたりする者が少なくなかったことにどうしたらいいのか途方にくれていたこともあった。が、投書の性別判断調査を行なってみると、意外にも本音を率直に表現し、それをもとにして、ジェンダーをみつめるきっかけになったのである。大学という文脈において、特にジェンダーについての本音を引き出すために今回の調査が有効であると気づいたのである。

4.2 本音の共有

本調査は、一度回答してもらって終了ということではない。回答を整理し、できるだけ本音を入れて、回答者にフィードバックすることが大切である。特に、その中の判断根拠を回答者全員で共有し、自分の視点と他人の視点の比較検討をしてもらおう。同じような世代の人たちの考え方（本音）を共有する場を設ける。詳しくは省略するが、自身の本音と他者のそれをとらえなおすことで感じるものが少なからずあるようだ。例えば、こういう考え方は、自分だけではなかった、自分とは違っていた、自分の意識がせまかった、こんな偏見があつて男女平等なんていえない等、様々に感じることもあるようだ。そして、それぞれの本音を確認しながら、書き言葉に対するジェンダー意識の発見とその意識の起源を求めていく者も登場する。社会全体のジェンダー意識をみつめ、その意識を相対化するようにもなる。小さな調査だが、その回答からにじみでてくることのもつ意義ははかりしれない。

4.3 書き言葉への興味

投書の書き手の性別判断調査を通して、確認できる利点のもう一つは、それまでただ漫然としかみてこなかった書き言葉に対して、興味をもつようになることである。これまで書き言葉にそれほど注意を払ってこなかった人が、書き手の性を判断する行為を通して、逆に自分の書き言葉はどう感じられるのか敏感になることがある。それは、ジェンダーという問題だけではなく、これまで受けてきた学校教育という文脈において、意識的にも無意識的にも形成されてきた制度としての書き言葉をめぐる経験が呼び起こされてくることがある。例えば、文体をめぐって、小学生の時、「女の子は『ですます体』で書きましょう」と言われたことや、大学受験での小論文の書き方は「だ・である体」で書くように指導されたこと、大学の課題レポートも文体を混用しないように注意されたこと、また、ある女性の社会人学生が「だ・である体」でレポートを書くのに苦労したこと等、それぞれの書き言葉をめぐる経験が思い出されてくる。なぜ、「です・ます体」は女らしく響くのか、論文は「だ・である体」で書かなければいけないのかという根本的な問いが投げかけられるようになってくる。文体を通した、一種の規範もしくは強制が歴史的社会的に形成されてきたことに気づくようになるのである。投書にとどまらず、小説や雑誌、広告などの媒体における文体にも関心が向き、話し言葉の文体との比較にも興味をわいてくることがある。それらの行為を通して、自己表現の一つである書き言葉、自分がより自由に表現できる書き言葉とは何かを考えるようになってくることがある。

4.4 調査の反省と課題

ここでは、投書を利用した性別判断調査を実質3年間行なってきた段階での反省点を述べたい。第一に、今回は、調査対象とした投書が山一証券自主廃業という、大企業の経営破たんを扱ったものであり、調査結果からでてきた、想定された投稿者として、男性はサラリーマン、女性は主婦という、大企業を支えてきた性別役割分業的発想がはっきりとあらわれている。これは、山一証券という大企業を扱った投書を利用したために生じたことなのか検討の余地がある。しかし、ある日の投書を利用した1995年の調査においても、同様の結果、傾向がみられた。どちらにしても、今後の調査において、調査に利用する投書のテーマを再度検討してみる必要がある。

第二に、このような調査は、投書の書き手の性を正解したかどうかというよりも、本音が出される判断根拠の扱いが大切になってくる。せっかく偏見やジェンダー意識に気づいても、調査しっぱなしではこの調査の意義も半分にしかならない。気づいたことをその後の生き方につながるような方向にもっていけるような方法を工夫しなければならない。特に、3.5.2で指摘されているように、女性自身が同性をマイナスイメージでみてしまっていることへの葛藤に対して、きちんと対処していけるようなプログラムを開発していかなければならない。

第三に、今回の調査は、当初計画していた通りにはいかず、調査対象者が、大学生やご

く少数の社会人にしか試みることができなかったことがあげられる。これからは、対象者を広げ、年齢、立場、居住地域など様々な環境にいる人に対して試みてみたい。また、感想にもあったように、同様の調査を10年後、20年後に行なってみることで、その時代の変化と意識の変化の関係を探っていきたい。判断根拠にどのような発想がみえてくるのか、変化していくのかしないのか、継続して見つめていきたいと考えている。

5. 新聞投書を利用した調査のために

ここでは、新聞投書を利用した性別判断調査をジェンダー意識に気づくきっかけとして、有効なものとなるような方法をいくつかあげたい。

5.1 ジェンダーステレオタイプに合わない投書を入れる

世間のジェンダーをめぐるステレオタイプに合う投書、例えば、料理、育児、家事などの家庭内のことを扱い、「です・ます体」で書かれている女性の投書や、政治経済・国家を扱い、「だ・である体」で書かれている男性の投書などは正答率も高く、その分、回答にあたって、ジェンダー意識に気づかない（考えない）まま終わることがある。したがって、このようなステレオタイプに合致しない投書をいくつか調査対象とする投書に含めるようにしたい。そのような投書の書き手の性を推測する場合に、ジェンダー意識をめぐる本音が思わず出てくることがあるからである。人工的に作成された文章ではなく、実際に投書されているものであるため、かなりの説得力をもって回答者にせまってくるだろう。

5.2 判断根拠を回答者全員で共有する

この調査は、本音を引き出し、自分の中に潜んでいるジェンダー意識に気づくきっかけ作りをするのが目的であるため、判断根拠を回答者全員で共有することが大切である。それに対し、自由に意見交換し、互いの本音を出すことを励ますようにしたい。率直に出してくれた本音を茶化したり、バカにしたり、批判したりしないように気をつけたい。本音の出しにくい教育現場で、本音を出してくれたことに対して十分な配慮を心がけたい。

5.3 書き言葉の性別判断をめぐる識者のコメントを紹介する

筆者の場合、対象のほとんどが学生であるため、判断結果・根拠をみると学生だからこそ、感じていると思いついてしまう傾向がある。若く、社会経験がそれほどないため、このような偏見を含めた本音やジェンダー意識が顔をだしてくると思ってしまう。3.5.3であげたように、社会人になればもっと判断ができているふしがある。

そこで、6.2.2で述べるように、推理作家や小説家、犯罪社会学者、国語学者といったいわば、社会経験の豊富な、書き言葉のプロともいえる識者でも、同様なジェンダー意識があることを示すことで、ジェンダー意識がいかに根強く浸透しているのか確認したい。ジェンダー意識は、識者でさえ気づいていないかもしれない、意外にしぶとい意識の一つ

であることを見つめていきたい。

5.4 応用編

今回は新聞投書を調査対象とした性別判断調査だけを報告したが、他にも新聞投書を利用することができる。それは、ある日の新聞投書を1通みせ、それに対するエッセイを一定の了解を得て（全員に見せる可能性があるということなど）、クラス全員に、書いてもらう。その中からいくつか選び、そのクラスで書き手の性別判断を行なう。同じクラスということもあり、身近な人の書いたものの性を判断するため、回答者自身の思い込みやジェンダー意識への気づきはさらに説得力をもってくる。かつて行なったものを紹介すると、結婚生活についての悩みを書き綴ったある投書を読んでエッセイを書いてもらい、それに対して、書き手の性を判断してもらった。結婚生活に理想を求めて書かれていたあるエッセイは、男性が書いたものだったが、7割が女性だと判断し、書き手も含め、クラス全員驚いたことがある。このような驚きは、まさに、ジェンダー意識への気づきになくはないものである⁽¹⁾。

6. 世間にある書き言葉に対するジェンダー意識

今回の調査は、主に学生を対象として、いわゆる社会経験の比較的少ない、素人による書き言葉の性別判断調査である。つまり、研究であれ、創作であれ、書き言葉に専門的に関わってこなかった人々の判断が中心である。とすると、書き言葉をめぐる今回出されたようなジェンダーステレオタイプは、素人だからこそ持っているものと感じるかもしれない。筆者も、今回の調査をするまではそう思い込んでいた。しかし、以下にみるように、これまで調査で提示されてきた発想や意識は、識者といわれる人々の間にも浸透している、根の深いものであることが分かる。書き言葉を通したジェンダーステレオタイプは、素人も識者もあまり差がないのである。つまり、ハビトウスとして、意識化しにくいほど、内面化されてしまったものの一つであると思われる。書き言葉を通して、思わず出てくるジェンダー意識は、年齢、職種を越えて、広く共有されているものであることが分かる。以下、書き手の性が分かってコメントする場合と分からないままでコメントする場合の2つに整理し、識者のジェンダー意識をみつめていきたい。

6.1 書き手の性が分かってコメントする場合

ここでは、主に女性の作品に対するコメントを取り上げて、紹介する⁽¹⁾。

6.1.1 女性が書いたエッセイに対する評価

木村治美氏は『黄昏のロンドンから』というエッセイで1977年大宅荘一ノンフィクション賞を受賞した。渡部昇一氏は彼女の作品を賛美し、「内容にもまして、私が感心したのは、木村治美さんの文体である。それは単なる日本語でなくて、はっきりした女性言

葉である。」と評価している⁽²⁾。これに対し、井出祥子氏は、『女のことば 男のことば』（1979）において、その文体を分析し、彼女の文体が女の甘えをみせるような丁寧さとくだけすぎた表現の共存、女の語彙がふんだんに使われていることを指摘し、「現代日本で、好ましいとして受け入れられている女性像と、少なからずかわり合いがあるのではないかと、鋭く批判している。書き手の性によって、文体が評価されることがある、また、それが世間で容認される好ましい「らしさ」に通ずるものであることのおかしさをついた点が興味深い。もし、仮に木村氏が書いたものが男性によって書かれたものとするなら、はたして、どれだけ文体が評価されたのか疑問が残る。女性だからこそ評価され、男性だったら評価されないとすると、書き手を評価しているというよりも、「女らしい」書き方を評価していることになりかねないからである。

6.1.2 女性短歌に対する評価

小林とし子氏は、「女性短歌はいかに批評されてきたか」（2001）において、特に1950年代の女性短歌の批評を紹介し、女性が作った短歌への偏見、または、ジェンダー意識を浮き彫りにしている。小林氏は、女性短歌の評価語を整理した結果、ベテランと言われる女性の歌人でも、非常に厳しい評価を受けていると指摘している。その根底には、男性歌人が女性歌人に対して、優越感をもって批評にあたっていたことと、女性歌人たちも男性の作った短歌に対して劣等感をもっていただけをあげている。そのため、「女であること」を意識した女性短歌が詠まれることが多かったとまとめている。小林氏の整理した中で、次の2つの評価語は、特にジェンダー意識が率直にあらわされていると思われる。一つは、女性短歌を見下した評価語（マイナス評価）で、「稚拙な表現」「幼稚」「表現未熟の感が深い」「感情過剰」「ヒステリーの症状」等がある。「稚拙な」という表現は、ベテランの歌人が作った短歌に対してもあつけらかんと使われ、男性の短歌に対して用いられる場合は（あまりないが）遠慮しながら使われているとしている。

2つめは、女らしいとされる短歌に対する賛辞としての評価語（プラス評価）で、「清純」「甘美な悲哀」「感受性」「女性でなかったら絶対作れない歌」等がある。これらは、6.1.1であげた、エッセイへの評価に通ずる、「女らしさ」の評価である。

これらの評価は、今回の性別判断調査の判断根拠に酷似していると思われる。短歌に対するマイナス評価は即、女性が書いたと判断した投書に対する判断根拠にあてはまるものである。女性が書いたとする投書は、よくねられておらず、何を言っているのか分からないといった判断を下し、論理的ではなく感情論になりがちとしたものに合致している。あたためて指摘するまでもないが、「ヒステリー」という評価語も、投書の判断根拠に登場してきたものである。一方、「女らしさ」をめぐる評価は、女性が本能的に持ち合わせているかのようにとらえたものである。投書の判断根拠においても、「情緒的」など女性ならではのものとして評価していることがある。このように、プロの歌人といわれる間でも、素人である学生と共通の評価をしていることに、ジェンダーの根深さをみる思いがする。

6.1.3 女性作家に対する評価

小説の世界においても、様々な評価が下されてきたと思うが、ごく最新のものを紹介したい。それは、阿刀田高氏が、『朝日新聞』のコラムで述べている箇所にある。一部抜粋したい。

女性作家の活躍がめざましい。今どき、男性だの女性だのと区別して考えること自体が時代錯誤なのかもしれない。けれど、私のみたところ、小説は男性より女性に好まれるもの、情緒的思考に優れた女性のほうが書きやすい部分を持っているのは本当だ。あるいは、男女差別のないこの分野に女性の優れた才能が集まってきているのかもしれない。（後略）

（「花ざかり女性作家」『朝日新聞』、2002年1月16日付）

コラムのタイトルが「花ざかり」とされていることから、すでに「女性」を揶揄した響きがあるように感じるのには考えすぎかもしれないが、男性作家である阿刀田氏の指摘は、小説というジャンルに関し、最新の状況を述べている。「男女差別のないこの分野」と言いきってしまっているが、異論を唱えたい人が少なからずいるだろう。阿刀田氏は、小説というジャンルでは、「男性より女性に好まれる」し、「情緒的思考に優れた女性のほうが書きやすい」と主張している。その論拠が具体的にあげられていないため、このままでは、6.1.2でみた女性短歌に対する「女らしさ」への賛辞と酷似してしまっている。また、「情緒的」というキーワードは、投書の判断根拠とも共通である。女性の小説家を称賛する根拠として、女ならではの能力が発揮できる分野であると言うのなら、男性の小説家はどうか感じるのだろうか。さらに、このような発想で賛辞された女性の小説家はどうか感じるのだろうか。男性と同等に扱ってもらえないことを再認識することになってしまうのではないだろうか。

さらに、『朝日新聞』のコラム「少女小説は作家の“ゆりかご”」（2002年2月20日付）は、少女小説を書き続けた後に、直木賞などを受賞するまでになった女性作家の活躍ぶりをまとめた記事である。そこでは、主に、作家唯川恵氏などを例にあげ、受賞できるよう作家に至る期間を少女小説を書くことで実力をつけてきたと強調している。一方で、唯川氏の小説は、「『物語作りは巧みだが、一般受けする少女小説風の成長物語の手法が抜けない』『まるでトレンドードラマのよう』と批評されることもある」と述べている。ここで気になるのは、なんらかの一流の賞を受賞した作家について、その作家の出发点とした作品のジャンルをことさら強調していることである。特に、少女小説というジャンルに関わりをもっていたことについて、このコラムを読むかぎり、見下しとしか響いてこない。非「少女小説」出身ならどうなのであろうか。また、男性作家が受賞した場合、少女小説を書いてきた場合とそうでない場合は、どう評価されるのであろうか。また、少

女小説出身の唯川氏の作品に比べ、他の受賞作品はどういう点で差があるのか具体的な批評がないだけに、女性作家を、または、少女小説出身作家を見下している感が否めない。

さらにつけ加えると、コラムのタイトルである「ゆりかご」には、他の小説のジャンルとは違って、少女小説は単なる「少女」向けの小説であるという見下しも含まれている感じがする。少女向けの小説は他の小説と比べて、作品内容、表現内容が劣るのであろうか。それほど力量がなくても書ける分野なのであろうか。小説論、作家論に素人の筆者には、このコラムでのコメントが、少女に対する、または、女性作家に対する見下しに思えてならないが、単なる思い違いであらうか。

6.2 書き手の性が分からずにコメントする場合

6.1では、書き手が女性である作品にコメントする場合を紹介してきたが、ここでは、書き手の性が分からない状態で、コメントする場合を紹介していきたい。今回の投書を利用した性別判断調査はこの中に含まれるものである。

6.2.1 小説を利用した性別判断調査

文章心理学の提唱者として、新しい分野を切り開いてきた波多野完治氏は、女性作家の文体を研究しながら、一方で、小説を利用して作者の性や作者名を問う調査を行っている。波多野氏は、その調査結果を、「男の文章、女の文章」（1955）にまとめている。ここでは、大学生を対象に、男女それぞれ6人の作家の文章（いずれも女性を主人公としたもの）を14文提示し、作家の性と作者名を推測させ、その理由を求める調査結果を紹介している。その調査の目的は、女性作家の文体の特徴を取り出すためである。作家の文体に性としての特徴があるかどうか、それを一般の人はどう感じ、性差が感じられるか試みたものである。詳細は省略するが、回答者となった大学生の判断根拠の中の一つに、主観的か客観的な記述があるかどうかという視点が重要なものとなっていることを指摘している。つまり、女性作家は主観的であるという前提をもって、作者の性を判断していたという結果となった。

6.2.2 幼女連続誘拐殺人事件における「犯行声明」「告白文」をめぐる

1988年から1989年に起きた幼女連続誘拐殺人事件の犯人から、新聞社あてに「犯行声明」「告白文」が送られてきたことがあった。それらをめぐり、犯人が分からない段階で、識者が犯人像をめぐってコメントを出していた。そこでの識者とは、推理作家、精神科医、臨床心理学者、犯罪社会学者、国語学者等である。犯人は、「今田勇子」と名乗っており、「犯行声明文」「告白文」はいわゆる女らしい文体で書かれ、過去に起きた子供にまつわる自身のつらい体験や犯行におよぶときの心情・行動を事細かに書きつらねたものであった。結局、犯人は20代の男性であることが判明した⁽³⁾。

識者のコメントをまとめた武田春子氏は、「言語性差のステレオタイプ」(1990)において、識者のコメントの中に、「根強い差別観念がある」という結論をだしている。武田氏がまとめた識者のコメントを一部紹介する。ちなみに、男らしさは、書き手を男性と判断した人のコメントであり、女らしさは、書き手を女性と判断した人のコメントである。

男らしさ	論理的、理路整然、非情緒的、挑戦的、悪ふざけ、ゲーム感覚
女らしさ	情緒的、陰湿、文章全体が長い、ネチネチ、子のない女の心情がよく書けている、男にはわからない心理を描写、丁寧、女らしい語彙やわかりかい

今回の調査においても女性に対する否定的なステレオタイプが数多く出てきたことに対して、抵抗を感じた学生、特に女子学生が少なからずいたが、この識者のコメントにも、女性に対する同様なステレオタイプが表現されている。「男にはわからない心理」「子のない女の心情」等にもよように、女が本能的に持っているかのような感覚、そしてそれを文体に投影しているかのように評価しているのは、これまでみてきた一連の作品に対するものと大差ない。

これを見て、すぐに思い浮かぶのが、今回の調査の判断根拠である。今回の調査の判断根拠とこの識者のコメントを合わせて、学生に提示すると、学生の方があらたな発見をする。今回のことについて、「識者といわれる人の意見は自分たちと変わらないのはどうしてなのか」という素朴な、しかし、決定的な疑問がでてくる。識者と学生である自分たちとの差について、考えはじめることになる。

6.3 まとめ

6.1及び6.2でまとめたことを整理しなおすと、特に、いわゆるプロといわれる人々にあって、書き手の性が分かっても、分からなくても、共通のコメントをする傾向にあるということがいえる。つまり、書き手の性が分かっていたら自信をもって、分からなければ留保という条件をつけながら、共通のジェンダー意識が吐露されてくることになる。今回の投書を利用した調査は、書き手の性が分からない段階で、主に学生が性を推測するという作業であり、回答者が自ら率直に思いを述べる場であった。それは、判断した後の感想において、偏見というキーワードが多くみられるように、自らの思いに対しての気づきが表現されていた。一方、プロが同様の作業をする場合、自身の判断根拠に対して、偏見や差別を持っているのではないかという感覚や気づきはあるだろうか。プロとしての日常に

において、そういう気づきのチャンス、きっかけは、余程のことがない限り、得られないのだろうか。それほどプロではない筆者も、今回の調査において、回答を通して、自戒しなければならないことに気づくチャンスを得た。ジェンダー意識も含めた、自分自身の中にある思い込みが常にあるということを前提として、自己批判しつつ、より事実を見ることのできる目を養っていく必要性を痛感している。

おわりに

今回の調査・研究は、男女共同参画社会に向けて、何が有効かを考えるきっかけ作りの一つの方法を提示しようと試みた。高度経済成長期を支えた「男は仕事、女は家庭」といった死別役割分業体制により、「男らしさ」「女らしさ」に組み込まれ、人として自由に生きていくことが困難になってきてしまった。経済関係における男女平等を推し進めるためにも、奥深く内面化されてしまったジェンダー意識を見なおす時期である。ジェンダーが縛りとなっている今日の日本社会において、その縛りから男女ともに解放され、人としてそれぞれのペースで、豊かに生活していけるジェンダー・フリーの社会を目指すためにも、そのきっかけとして、今回の調査が役に立つのではないかと考えている。男女平等を掲げている教育現場において、真の男女平等の意識を作り出すためには、むしろ、男女に対する本音を自由に表現すること、そして、その本音を見つめることによって、次のステップに進めるのではないかと考えている。

今回の調査は、調査方法や調査後のフォローなど改善すべきことが少なくないが、社会言語学の応用として位置付け、今後も継続して取り組んでいきたいと考えている。

また、今回の調査・研究で回答者となってくれた方々にあらためて感謝したい。彼女ら、彼らの協力がなければ、今回の調査・研究は不可能であった。彼女ら、彼らの本音や葛藤によって、筆者自身の中にある本音にも気づくこともできた。回答の中で表現されたことば一つ一つは、今後も宝物として大切にみつめていきたい。さらに、新聞資料、ジェンダー関係の資料を提供してくれた図書館（いちいち名前はあげないが）や新聞社に感謝申しあげたい。

最後に、今回、山一証券自主廃業に関連した投書を取り上げたが、書き言葉に対する感想以外に、山一証券自主廃業についての感想がいくつかあったので、ここに紹介したい。

- ・破たんの裏側で苦しんでいる人の訴えをこんなに細かく見たのははじめてで、辛さがひしひしと伝わってきた。
- ・世の中は不公平。
- ・元役員の実責任追求をすべき。

- ・ 辞職するだけでは単なる責任のがれ。
- ・ 山一証券が破たんする前は一切このような意見が上がっていなかったのに、結果をみてから、以前のことについて批判するのはひきょうであると思う。日本のニュースもいつもそうである。結果がでてから、「ここはこうするべきだった」などと言うなら、「こうする方がよいのでは」と運動すべきであり、責める前にどうするべきか考える必要があるのではないだろうか。

山一証券自主廃業のみならず、日本の経済経営問題をいかに解決し、よりよい社会に向けて提案できるかが問われている。学生たちがこういう思いでいることを、大企業のトップにいる人たちはどう感じるだろうか。また、山一証券自主廃業は、突然のことであり、社員の大半にとって寝耳に水だったと報道されている。自分の会社の状況が分からないまま仕事をし、あげくのはてに解雇されるとなると、どんな気持ちになるだろう。怒りはないのだろうか。詳細は、熊谷（1999b）で論じているが、新聞投書を読んでも、当事者、つまり、当該会社の社員本人からのものは皆無である。川人博氏は、『過労自殺』（1998：83-87）において、会社員の過労自殺者の遺書を分析し、おわびのことばばかり『過労自殺』で、会社に対する怒りの声がないとしている。組織の一員として、怒りという感情をもつことすら自己規制してしまうとしたら、いたたまれない。今や日本全国で会社の倒産やリストラが増え、リストラされる者、または、利潤追求のためのコスト削減で労働強化されるため過労状態になる者など、過労自殺も含め、自殺者数も3万人にのぼっている。このような状況を打開するためにも、新聞投書欄が、会社の組織で押しつぶされそうになっている社員の思いを伝える、つまり、言論の自由を保障する場になることを祈らずにはいられない。現在社会において、新聞の果たす役割は大きい。日本社会の片隅でもものも言えずに悩んでいる人に勇気を与える場として、投書欄をさらに充実したものにしてほしい。そのことが、男女ともに、対等なパートナーとして、生きていける社会の実現にも大きな貢献をしていくことになることは間違いない。

注：

はじめに 及び 第1章

1.日本の新聞投書と違い、イギリスの特に高級紙といわれている新聞に掲載されている投書は、そのタイトル *Letters to the Editor* が示す通り、すでに新聞記事となったものに対する意見、批判が中心的な内容となっている。また、高級紙の特徴かもしれないが、掲載される投書の書き手として、圧倒的に男性が多く（例えば、*The Times* についていえば、一日平均18通のうち、女性のものは2.4通であり、男性のものが9割近くになっている）、また、内容も政治・経済中心である。投稿者は、氏名、肩書（女性場合、特に、Mrs. Missとつけることがある）、大まかな住所、メールアドレス、また、投書を受理した日付等が紹介されるが、年齢はない。さらに、具体的に紹介すると、例えば、*The Times*の投書欄では、まず、投稿者の紹介があり、本文は、Sirで始まり、最後は、yours faithfully または sincerely とし、氏名、住所で終わっている。この投書の形式は、いわゆる、手紙形式にのっとっていると思われる。

2.例えば、NHK名古屋放送局制作『中学生日記』に描かれる家庭の場面では、食事を作る妻と新聞を読む夫というパターンが普通である。中学生を主人公とした教育番組だが、ジェンダーについては、このような状況である。

3.ハウス食品制作の広告であるが、1980年9月29日に抗議を受け、10月29日に放送中止となっている。

4.例えば、テレビ朝日制作の『京都迷宮案内』などにみられるように、女性が新聞編集長や記者として登場し、新聞を手にとって読むというシーンがよく出てくる。

5.ただし、漆田(2001)が指摘するように、「女らしい」文章、文体が存在するという前提で調査する意図はないことを確認したい。

6.『朝日新聞』2001年9月15日付、国際衛星版に掲載された記事である。

7.主婦をめぐる論争については、上野千鶴子編『主婦論争を読むI・II』を参照されたい。

第2章

1.鷲留美氏は、「『女ことば』と権力」（2001）において、作られた女らしいことばを「標準女性語」と称し、その起源について考察している。

2.詳しくは、佐竹(1998)「『女のことば／男のことば』規範をめぐる」を参照されたい。関西の大学生を対象に、女／男ことばをめぐる調査を行なっている。

3.詳細は、漆田(2001)を参照されたい。

4.詳細は、佐々木(2001)を参照されたい。

5.他の新聞についても、投書のみてみたが、新聞社ごとの方針や思惑があり、様々な要因で基準がはっきりしないものがあるため、今回、一つの新聞社のものを一貫して採用することにした。しかし、他の新聞に掲載された投書も念頭に入れていることは確認したい。

6.熊谷(1997)、347ページ。

7.回答結果を分析しても、どちらがより強く判断に影響を与えているのか分からなかったのである。

8.山一証券自主廃業関連の新聞各社の社会面での取り扱いについては、熊谷(1999a)を参

照されたい。

9.熊谷(1999c)、7ページ。

10.詳細は、熊谷(1999b)を参照されたい。

第3章

- 1.ただし、ジェンダーステレオタイプが全くの架空のことであると決めつけてしまうこともできない。何らかの理由があつて、ジェンダーステレオタイプが形成され、維持されていることは確かである。また、ジェンダーステレオタイプと現実認識とはどういう違いがあるのかと問われても、決定的なことをあげることは難しい。ただ、ジェンダーステレオタイプは、「らしさ」を矛盾をもたずに内面化したものであり、現実認識は、「らしさ」に対して、実態をふまえ、距離を置いて（矛盾として）認識しているものととらえたい。この点については、今後も考え続けていきたい。
- 2.繰り返すが、戦後の新聞投書での「です・ます体」の使用は、『朝日新聞』の場合、女性で5割、男性で2～3割であり、女性の投書に圧倒的に使用されているわけではない。
- 3.『朝日新聞』1998年11月24日付の記事である。これ以外にも、同紙は、専業主婦について、シリーズとしてこの問題を取り扱っている。
- 4.ワイドショーについては、いちいち番組名をあげないが、特に、民放の放送局で活発に放送されている。一つのワイドショー番組を視聴してみるだけで、このことが分かるだろう。
- 5.「バリキャリア」という新語もあるそうだ。バリバリ働くキャリアウーマンのことを年下の女性社員が揶揄してつけたとされる。
- 6.『朝日新聞』の川柳欄に「今キャリアウーマン昔行かず後家」（2001年5月23日付）という、働くシングル女性を揶揄した表現も依然として存在する。シングル男性よりもシングル女性に対する見下しの方が強くある。
- 7.回答の中に男性に対する否定的なイメージとして、母と関わりの深い息子のことを「マザコン」とみなす感想もある。しかし、「マザコン」のもつイメージの根底には、過保護でやり手の母親に従順な息子という関係性があり、ここでも、母親である女性は否定的な存在として提示されている。もし、母親のことを心配する息子であれば、親思いの孝行息子といわれ、伝記で紹介されるほど高く評価されるものとなる。また、「マザコン」というレッテルをはられる男性は、少数である。男性全体にあてはまるものではない。
- 8.涙をめぐっては、「らしさ」に結びつけて解釈される、典型的なものである。1996年5月7日、アメリカでおきた教授父娘射殺事件に関する記事で、『朝日新聞』が、妻の会見について、「終始、感情を抑えたしつかりした話し方で、涙は最後まで見せなかった」（1996年5月12日付）と報道し、これがきっかけで、妻が犯人ではないかという疑惑を生むことになったと反省している。家族の悲劇的状况に対して、妻は泣くことが「女らしい」こととして自然に受け入れられ、泣かないと何か裏があると勘繰ってしまう、ジェンダー意識が脈々と存在する。

2002年の今日においても、田中真紀子元外務大臣の涙に対して、小泉純一郎首相が、「涙は女性の最大の武器」と発言し、波紋をなげかけた。なぜ泣いたのかという問題の核心をうやむやにし、女性が泣いたことを強調している。このことから、女性は、大臣にな

っても、ジェンダーによる縛りが顔をもたげてくることが証明される。女性であれば、大臣という立場にある者でも、「涙」すれば、女らしさを示すことになり、プロたるべき大臣としては、半人前でしかないと解釈される。男性の大臣が泣いたら、どう解釈されるのであろうか。女性は、涙の解釈を通して、社会的に見下されていることが、今回のことを通しても証明された。

しかし、一方で、「女らしく」しないと、大臣であっても見下されてしまうのである。外務省改革を行なう姿を、「じゃじゃ馬」として田中真紀子元外務大臣は様々なところで揶揄されてきた。つまり、女性は女らしくするとプロとしては失格だとみなされ、女らしくしないと女らしくない（または、男まさり）とさらに見下される。ロビン・レイコフ(1975)がことばに関わり指摘した、女性をめぐる二重基準が、現在も適用されているのである。

9. 田中真紀子元外務大臣が涙したことについて、同僚である他の女性大臣は、国会で、男性側の解釈を支持し、彼女に対して距離を置いたことがその証拠である（「『涙は宝石』『私も言われてみたい』『女の武器』発言 女性閣僚が感想」『朝日新聞』2001年1月31日付）。同紙同日のコラムにおいて、小倉千加子氏が「切り捨てられた『危険な女』」として、「同じ内閣の同性の同僚からはこの日はっきりと見捨てられたのだ」と述べている。閣僚の間でもこのような状況である。個々人が実践するというのは、かなりきついものがあることを示している。

第4章

1. 回答の中には、自分の意見が書けて面白かった等のコメントがある。判断根拠を詳しく書いてくれる人もいる。あるいは、ひねった問題かもしれないと、注意深く判断したという感想もある。

第5章

1. これらの作業を通して、自身が書いたものを他の人に読んでもらい、書き手の性としてどう判断されるか、関心を抱くようになる人もいる。

第6章

1. 特に女性の作品に注目したが、これに関して、最近、女性の表現への見下しに対して、テクスチュアル・ハラスメントという名称が出てきた。今後、このような認識が深まっていくことを期待したい。
2. 「日本語の性について」（『あけぼの』1977年7月号、1ページ）に掲載されている。
3. この事件の社会的影響が大きく、犯人について様々な分析が試みられてきた。その中に、瀧野隆浩氏の『宮崎勤精神鑑定書』（1997、講談社）がある。そこでは、声明文や告白文に対する、国立国語研究所所長である野元菊雄氏（当時）の判断を紹介し、性別は7対3で男性、また、年齢は、40歳前後としている。

新聞資料

『朝日新聞』『読売新聞』『毎日新聞』各縮刷版

参考文献

- 阿久津英、内野光子、小林とし子(2001)『扉を開く女たち』砂子屋書房
- 井出祥子(1979)『女のことば男のことば』日経通信社
- 犬伏由子、椋野美智子、村木厚子(2000)『女性学キーナンバー』有斐閣選書
- 江種満子、漆田和代編(1992)『女が読む日本近代文学—フェミニズム批評の試み』新曜社
- 江原由美子(2001)『ジェンダー秩序』勁草書房
- 遠藤織枝編著(2001)『女とことば』明石書房
- 藤野千夜(2001)「日本語とセクシュアリティ」 斎藤美奈子編(2001)『男女という制度』
岩波書店、105~36.
- 現代日本語研究会編(1997)『女性のことば・職場編』くろしお出版
- 波多野完治(1955)「男の文章、女の文章」 宮城音弥編『ことばの心理』河出書房、
98~128.
- 平田由美(1999)『女性表現の明治史』岩波書店
- 寿岳章子(1979)『日本語と女』岩波書店
- 金井美恵子(1984)『おぼさんのディスクール』筑摩書房
- 川人博(1998)『過労自殺』岩波書店
- 小林とし子(2001)「女性短歌はいかに批評されてきたか」 阿久津英他(2001)『扉を開く
女たち』砂子屋書房、215~47.
- 熊谷滋子(1996)「女の文体の移り変わり」『人文論集』静岡大学人文学部、第47号の1、
263~75.
- 熊谷滋子(1997)「投書とジェンダーをめぐる」『人文論集』静岡大学人文学部、第48
号の1、345~62.
- 熊谷滋子(1999a)「新聞の社会面をジェンダーで読む」篠原三郎、中村共一編著『市場社
会の未来』、ミネルヴァ書房、69~86.
- 熊谷滋子(1999b)「山一証券自主廃業をめぐる新聞投書にみるジェンダー」『人文論集』
静岡大学人文学部、第50号の1、145~63.
- 熊谷滋子(1999c)「ジェンダーと現実認識」『ことば』20号、現代日本語研究会、4~17.
- 熊谷滋子(2001)「投書で『かなんことはかなんと言おう』」 遠藤織枝編『女とことば』
明石書店、180~88.
- 桑原武夫(1976)『第二芸術』講談社学術文庫
- Robin, Lakoff(1975) Language and Woman's Place. New York:Harper.
- 牧野成一(1979) Sexual Differences in Written Discourses. *Papers in Japanese
Linguistics*. vol. 6. 195~217.
- メイナード、泉子、K. (1997)『談話分析の可能性』くろしお出版
- 中村桃子(1995)『ことばとフェミニズム』勁草書房

- 中村桃子(2001)『ことばとジェンダー』勁草書房
- 西村典子(1998)『投書のすすめ』文芸社
- 落合恵美子(1994)『21世紀の家族へ』有斐閣選書
- れいのるず・秋葉かつえ編(1993)『おんなと日本語』有信堂
- 斎藤美奈子編(2001)『男女という制度』岩波書店
- 佐々木由香(2001)「『ネカマ』のすすめー私がだました男たち」 斎藤美奈子編『男女という制度』、岩波書店、81~104.
- 佐竹久仁子(1995)「女の文体・男の文体」『ことば』16号、現代日本語研究会、52~68.
- 佐竹久仁子(1998)「『女のことば／男のことば』規範をめぐる」『ことば』19号、現代日本語研究会、53~68.
- 武田春子(1990)「言語性差のステレオタイプ」『女性学年報』第11号、pp.28~39,日本女性学研究会
- 瀧野隆浩(1997)『宮崎勤精神鑑定書』講談社
- 卓星淑(1999)「研究論文における文末表現の一考察」『ことば』20号、現代日本語研究会、147~61.
- 上野千鶴子編(1987)「主婦論争を読む」I 勁草書房
- 上野千鶴子編(1995)「主婦論争を読む」II 勁草書房
- 漆田和代(2001)「『女性らしい』文章は過去のもの」 遠藤織枝編『女とことば』明石書店、80~90.
- van Dijk, Teun A.(1975) Action, Action Description, and Narrative. *New Literary History* 6. 273~94.
- 鷺留美(2001)「『女ことば』と権力」『女性学』2001, vol.9 日本女性学会、新水社、6~24.